

# 【ファーストステップFX】

Part2トレーダーとしてのの

レベルアップの為に

第5章

テクニカル分析

株式会社チャートマスター

## ■はじめに

### 【推奨環境】

このレポート上に書かれている URL はクリック出来ます。出来ない場合は最新の AdobeReader をダウンロードして下さい。(無料)

<http://www.adobe.co.jp/products/acrobat/readstep2.html>

### 【著作権について】

このレポートは著作権法で保護されている著作物です。

下記の点にご注意戴きご利用下さい。

このレポートの著作権は作成者に属します。

著作権者の許可なく、このレポートの全部又は一部をいかなる手段においても複製、転載、流用、転売等する事を禁じます。

このレポートの開封をもって下記の事項に同意したものとみなします。

このレポートは秘匿性が高いものである為、著作権者の許可なく、この商材の全部又は一部を如何なる手段においても複製、転載、流用、転売等する事を禁じます。

著作権等違反の行為を行なった時、その他不法行為に該当する行為を行なった時は、関係法規に基づき損害賠償請求を行なう等、民事・刑事を問わず法的手段による解決を行なう場合があります。

このレポートに書かれた情報は、作成時点での著者の見解等です。著者は事前許可を得ずに誤りの訂正、情報の最新化、見解の変更等を行なう権利を有します。

このレポートの作成には万全を期しておりますが、万一誤り、不正確な情報等が有りましたが、著者・パートナー等の業務提携者は、一切の責任を負わない事をご了承願います。

このレポートを利用する事により生じた如何なる結果につきましても、著者・パートナー等の業務提携者は、一切の責任を負わない事をご了承願います。

目次

※目次の見出しをクリックすると、その見出しのページに移動します。

■ (1) テクニカル分析とは.....	5
■ (2) トレンド追随型テクニカル指標 (トレンドフォロワー型テクニカル指標) .....	7
◆トレンドライン【Trendline】.....	8
トレンドラインの引き方 .....	8
【注目すべきポイント】 .....	9
◆ダウ理論 .....	11
◆グランビルの法則 .....	15
【買いサイン】 .....	15
【売りサイン】 .....	16
◆チャンネルライン .....	19
◆トレンド系テクニカル指標の代表格単純移動平均線 (SimpleMovingAverage、SMA) .....	21
・移動平均線とは .....	21
・移動平均線の基本 .....	22
・平均レート数 .....	23
移動平均線で分析 .....	23
◆加重移動平均線 (WeightedMovingAverage、WMA) .....	27
◆指数平滑移動平均線 (ExponentialMovingAverage、EMA) .....	29
◆エンベロープ (Envelope) .....	30
◆T 3 移動平均線 (T 3 MovingAverage、T 3 MA) .....	31
◆ボリンジャーバンド (BollingerBands) .....	32
・売買ポイント .....	32
1. 縮小後の転換 .....	33
2. 外に飛び出した後のトレンド継続 .....	34
3. ボトムトップ生成後のトレンド反転 .....	36
◆パラボリック・SAR (ParabolicSAR) .....	37
・売買ポイント .....	37
◆アベレージ・トゥルー・レンジ (AverageTrueRange、ATR) .....	39
◆ケルトナー・チャンネル (KeltnerChannels) .....	40
・売買ポイント .....	40
◆一目均衡表 (IchimokuKinkoHyo) .....	41
・売買ポイント .....	41
■ (3) オシレーター系テクニカル指標.....	44

## 【ファーストステップFX】Part2第5章テクニカル分析

◆MACD (MovingAverageConvergence/Divergence) .....	45
・売買ポイント .....	45
◆ディレクショナル・ムーブメント・インデックス (DirectionalMovementIndex、DMI) .....	61
・売買ポイント .....	61
◆アベレージ・ディレクショナル・ムーブメント・インデックス (AverageDirectionalMovementIndex、ADX) .....	63
◆モメンタム (Momentum) .....	65
◆ROC (RateofChange) .....	67
◆RSI (RelativeStrengthIndex) .....	69
・売買ポイント .....	69
◆ストキャスティクス・モメンタム・インデックス (StochasticMomentumIndex、SMI) .....	79
・売買ポイント .....	80
◆スロー・ストキャスティクス・オシレーター (StochasticOscillator (Slow)) ...	81
◆シャフ・トレンド・サイクル (SchaffTrendCycle、STC) .....	82
・売買ポイント .....	83
◆コモディティ・チャンネル・インデックス (CommodityChannelIndex、CCI) .....	84
・売買ポイント .....	84
◆デトレンディッド・プライス・オシレーター (DetrendedPriceOscillator、DPO) .	86
・売買ポイント .....	87
◆トゥルー・ストレングス・インデックス (TrueStrengthIndex、TSI) .....	88
・売買ポイント .....	88
◆ウィリアム・パーセント・レンジ (Williams' PercentRange (%R)) .....	90
・売買ポイント .....	91
◆ピボット・ポイント (PivotPoints) .....	92

## ■ (1) テクニカル分析とは

テクニカル分析とは、簡単に言えば、各テクニカル指標を使用して、過去の値動きのパターンと現在の値動きのパターンを見比べて、パターンが同じ（似たような）動きになった場合は過去のパターンと同じ値動きをすると予想し、値動きの動向を分析するものです。

テクニカル分析に用いるテクニカル指標は2つに分けられます。  
簡単に説明します。

### ・「トレンド追随型テクニカル指標」

価格の方向性を示す指標。

### ・「オシレーター系テクニカル指標」

買われ過ぎ、売られ過ぎを示す指標。

テクニカル分析に用いるテクニカル指標の中でも、上昇（下降）トレンド時に有効な指標や横這い時に有効な指標等、様々なものがあり、それぞれ長所、短所があります。

まずはテクニカル分析を始めるに当たって、各テクニカル指標の見方等を知る事から始めましょう。

テクニカル指標を全て覚える必要はありませんが、多くの指標の特徴を知れば、自分の売買スタイルには何が合っているのか、今の相場にはこのテクニカル指標が有効かも知れない、2つの指標を組み合わせてそれぞれの短所を補えるかな？、といった風に視野が広がって来ると思います。

俺はテクニカル分析は知っているよ、と思っている方も、真剣に読んでみて下さい。

株式会社チャートマスターで多くの方を教えてきた経験から、ほとんどの方がいい加減な覚え方しかしていない事を行っています。

基礎固めをここでしっかり行って下さい。

[▲目次へ戻る▲](#)

■ (2) トレンド追随型テクニカル指標 (トレンドフォロー型テクニカル指標)

先ず相場の値動きには流れがあります。

簡単に言うと川の流れのようなものです。

今自分の目の前にある川がどちらに向かって流れているのかを知る事で、川に入って泳ぐなら、上流（流れに逆らう方向）に向かって泳いだ場合、非常に疲れる事くらい、容易に想像出来ますよね？

逆に下流（流れに乗る方向）に向かって泳いだら、自分の力で泳がなくても勝手に進んで行けます。

このように先ず、川に入る前に流れを知る・・・

そのツールが **トレンドフォロー**と呼ばれる**テクニカル分析**なのです。

[▲目次へ戻る▲](#)

### ◆トレンドライン【Trendline】

トレンドラインとは、**上昇相場であれば安値と安値を結んだ線、下降相場であれば高値と高値を結んだ線**の事です。

トレンドラインはサポート・レジスタンスの水準を示してくれます。

#### トレンドラインの引き方

トレンドラインの引き方としては、2点以上の安値、または、高値を結びます。

引いたトレンドラインが有効であれば、3点目で価格が反転、4点目でも価格が反転というように、そのトレンドラインに沿って価格が動いて行きます。



上昇相場です。

1点目と2点目で引いたトレンドラインが有効に機能している事が分かります。





こちらは下降相場です。

同じく1点目と2点目で引いたトレンドラインが有効に機能している事が分かります。

**【注目すべきポイント】**

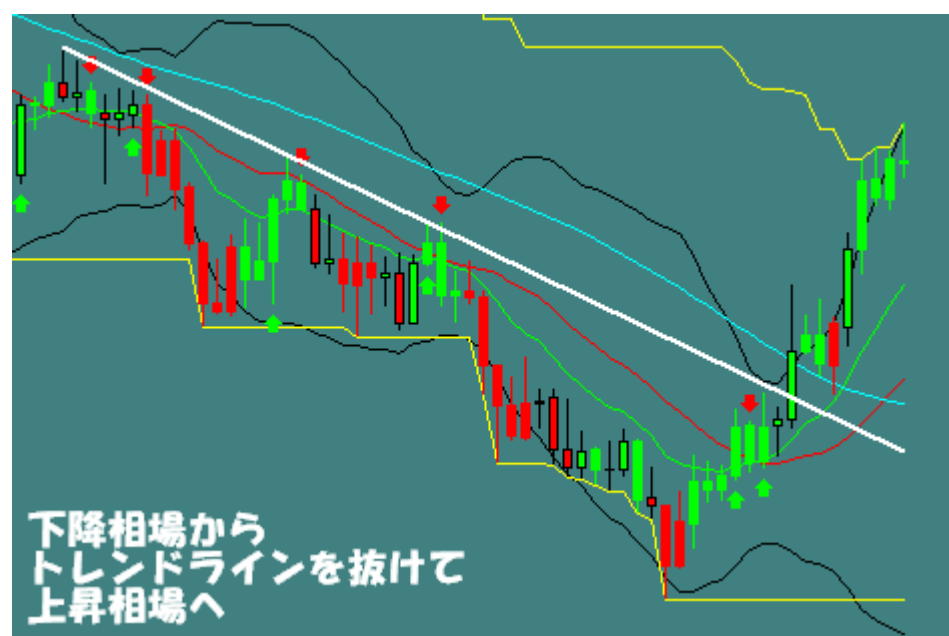
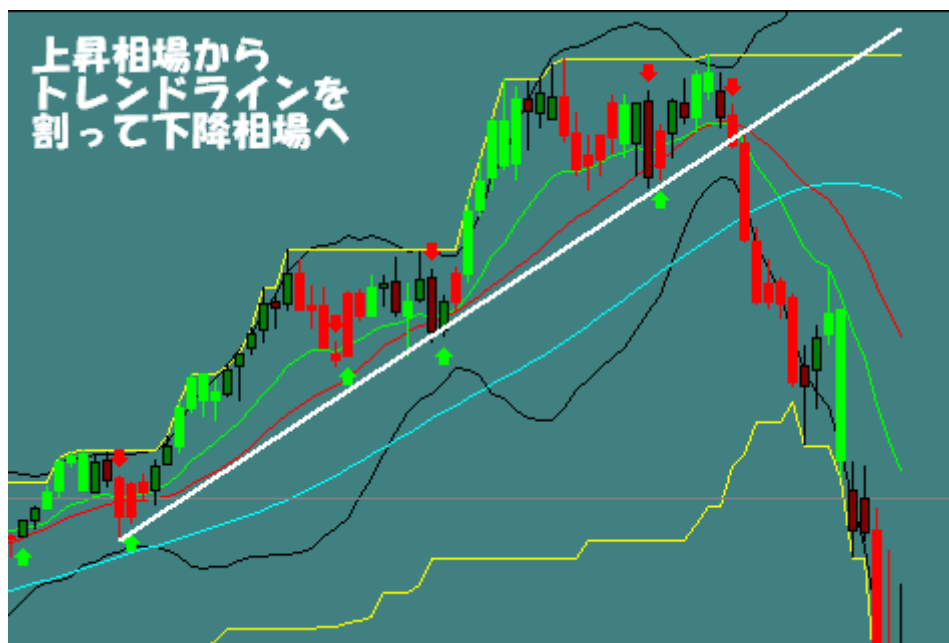
上昇トレンドラインを割り込んで価格が下落すると、上昇トレンドの終わりを示します。下降トレンドラインを割り込んで価格が上昇すると、下降トレンドの終わりを示します。

しかし、トレンドはずっと続くものではありません。

問題は、そのトレンドラインがいつまで続くのか。

3点目、4点目とトレンドラインに沿って動けば動く程、市場の参加者は「このトレンドがいつ終わるのか」に注目し始めます。

そして、そのトレンドラインが破られると、相場は新しい方向へと動き始めます。



見ての通り、トレンドラインが破られると、相場は新しい方向へと動き始めます。

トレンドラインは非常に単純なテクニカル分析ですが、ほとんどの市場参加者がこのトレンドラインを使用して相場を見ていますので、非常に有効な分析ツールとして使用出来ます。

[▲目次へ戻る▲](#)

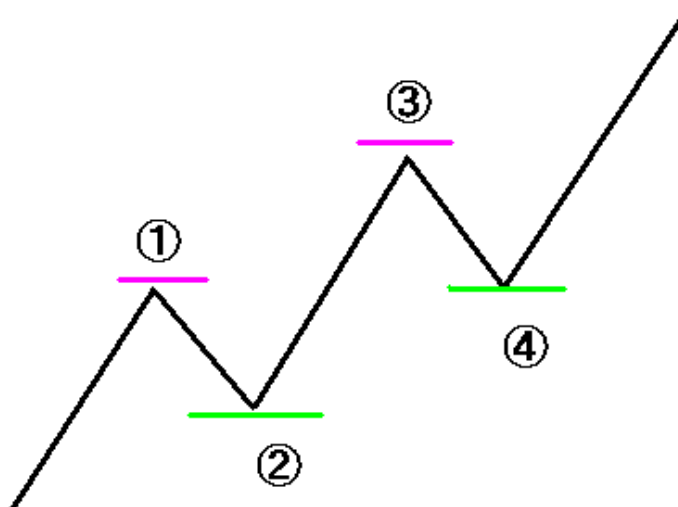
## ◆ダウ理論

ダウ理論とは、多くのテクニカル分析の根底に存在する理論です。

簡単に説明すると、

1. 平均はすべての事象を織り込む
2. トレンドには3種類ある
3. 主要トレンドは3段階からなる
4. 平均は相互に確認されなければならない
5. トレンドは出来高でも確認されなければならない
6. トレンドの転換は明白なシグナルが出るまで継続する

ダウ理論は、この6つの基本法則から成り立っていますが、FXで非常に有効なトレンドの判断として使用するダウ理論を解説します。

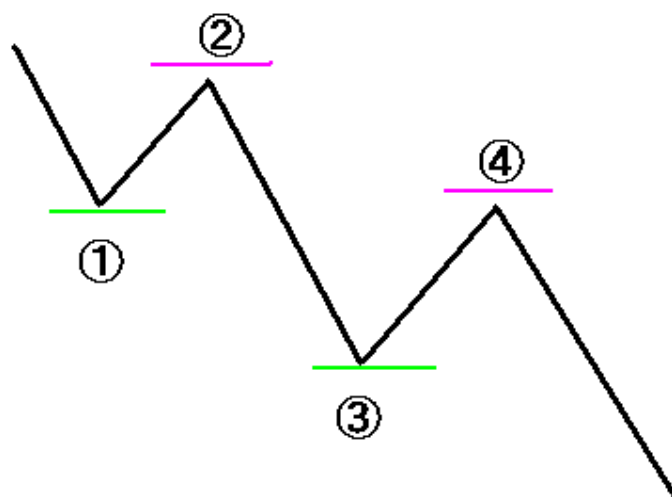


※黒いラインは価格です。

この図の②と④の地点で価格が転換して行っているのですが、ダウ理論のアップトレンドの条件として、「安値が切り上がる（前回の安値よりも次の安値の価格が高くなる）」、更に、「高値も切り上がる（前回の高値よりも次の高値の価格が高くなる）」、この2点が挙げられます。

この条件を満たしていれば、現在は【アップトレンド】と定義出来ます。

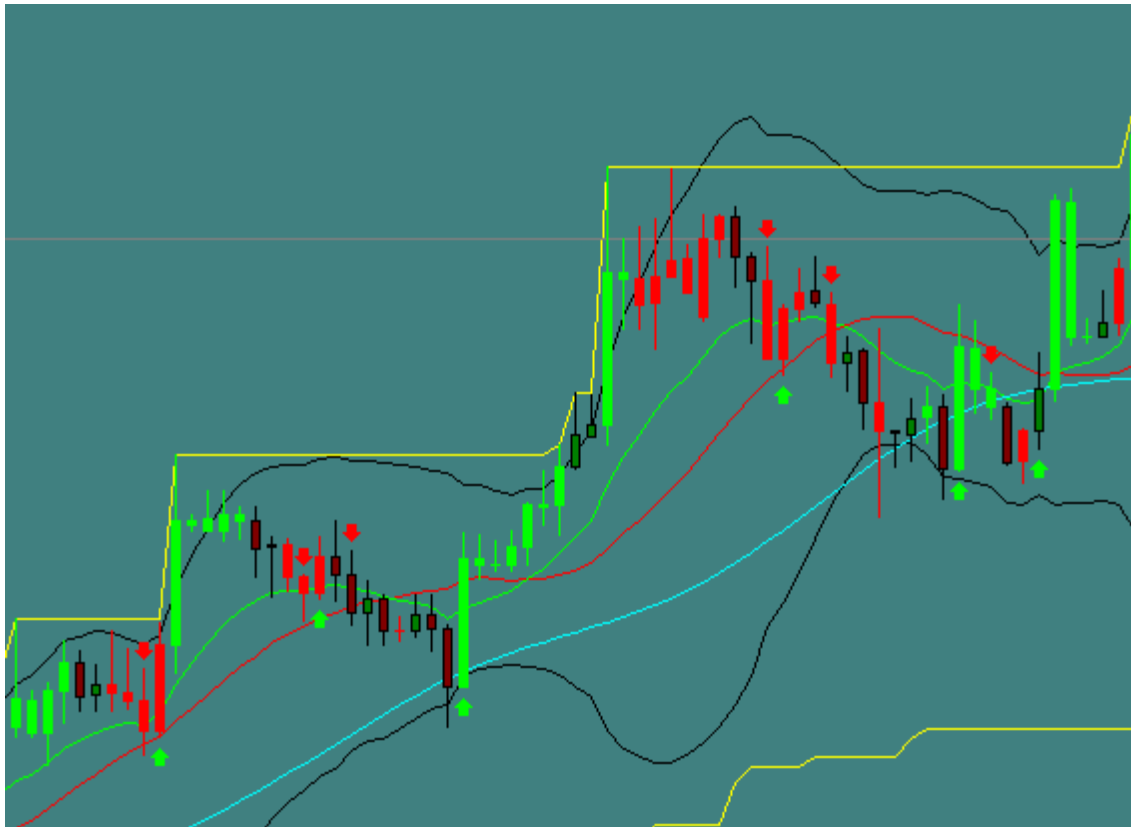
では、続いてダウトレンドです。  
この場合も簡単です。



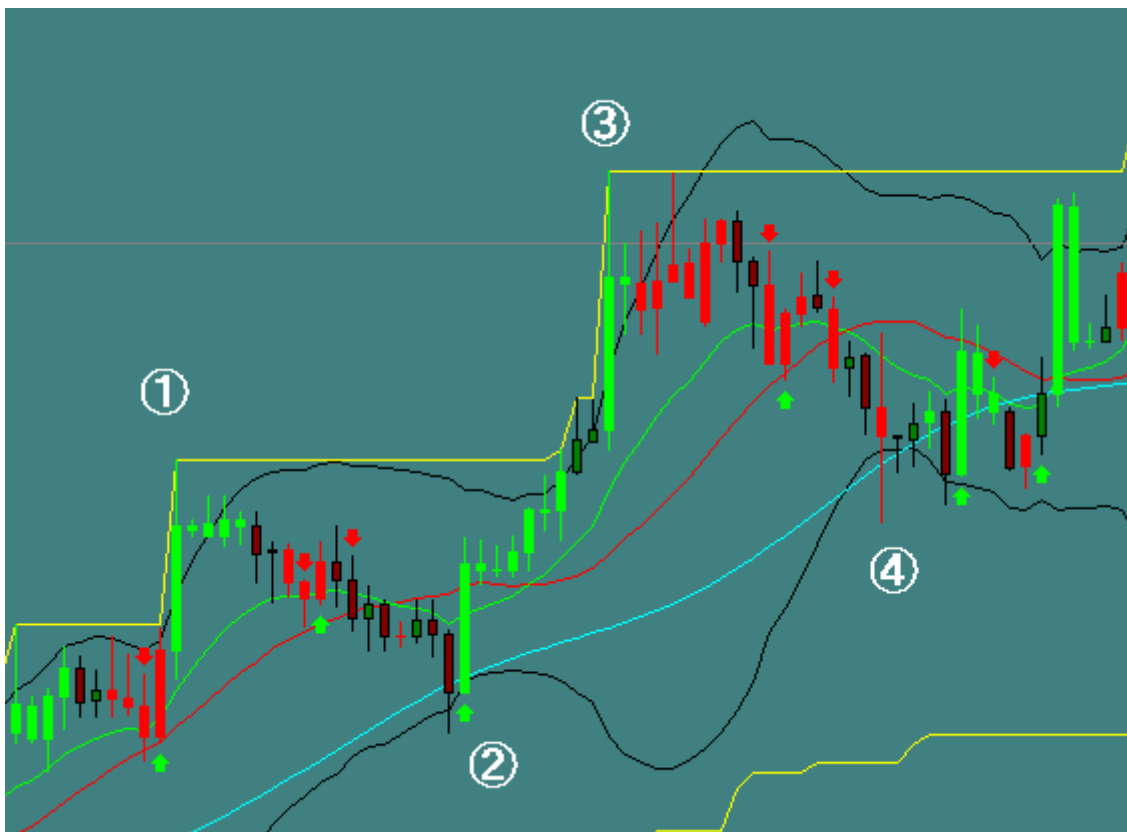
※黒いラインは価格です。

この図の②と④の地点で価格が転換して行っているのですが、ダウ理論のダウトレンドの条件として、「高値が切り下がる（前回の高値よりも次の高値の価格が低くなる）」更に、「安値も切り下がる（前回の安値よりも次の安値の価格が低くなる）」、この2点が挙げられます。

この条件を満たしていれば、現在は【ダウトレンド】と定義出来ます。  
それでは実際に例を挙げて見てみましょう。



現在はどっちのトレンドか分かりますか？非常に簡単ですよ。



このように非常に単純で簡単な定義ですが、  
基本の部分なので、このダウ理論はしっかりと覚えておいて下さい。

[▲目次へ戻る▲](#)

### ◆グランビルの法則

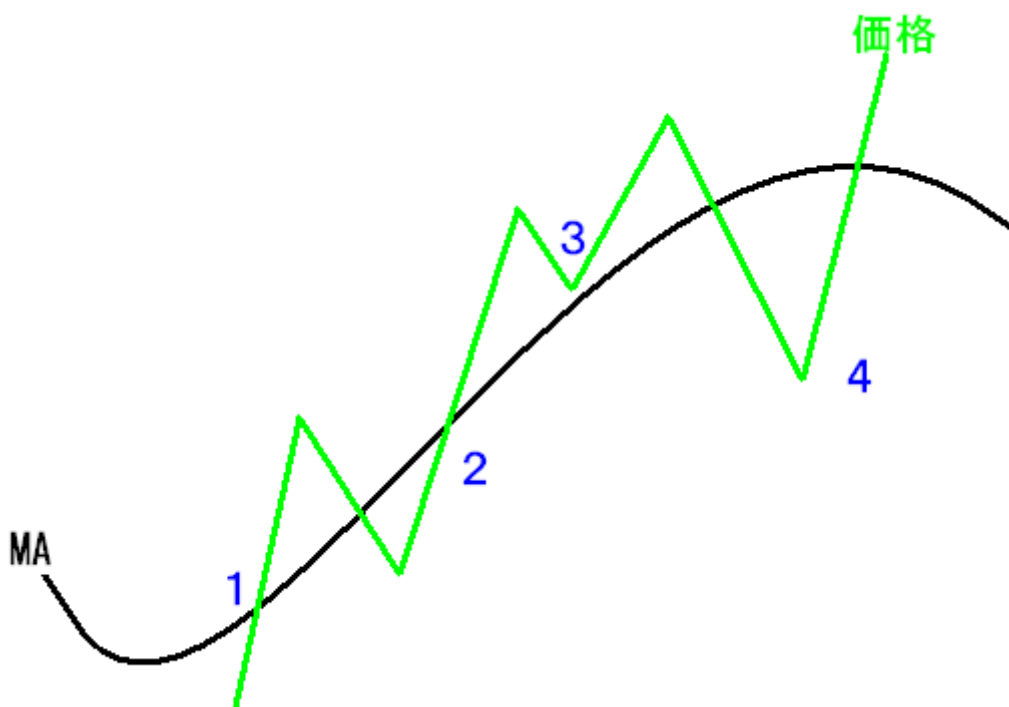
グランビルの法則 (Granville's law) とは、移動平均線を考案した米国ウォール街の株式アナリスト、ジョセフ・グランビル (Joseph E. Granville) が1960年代に発見した、**価格と移動平均線の位置関係を利用した法則**です。

この法則は「買いサイン」4つ、「売りサイン」4つ、合計8つの基本法則から構成されます。

#### 【買いサイン】

まず、買いサインから解説して行きます。

黒の曲線はMA、緑は価格です。買いポイントは4つあります。



#### 【1】トレンドフォロー

下降していたMAが上向き、あるいは、横這いとなった時に、価格の終値がMAを上抜けしたら買い。

#### 【2】トレンドフォロー、押し目買い

MAが上向きの時に、価格がMAを割って下落したが、再びMAを突き抜けて反発、終値がMAを上回ったら買い。

**【3】トレンドフォロー、押し目買い**

終値が MA を上回って推移して、MA に近づく下落を見せたが、結局、終値が MA を下抜かずに上昇したら買い。

**【4】リバウンド、逆張り**

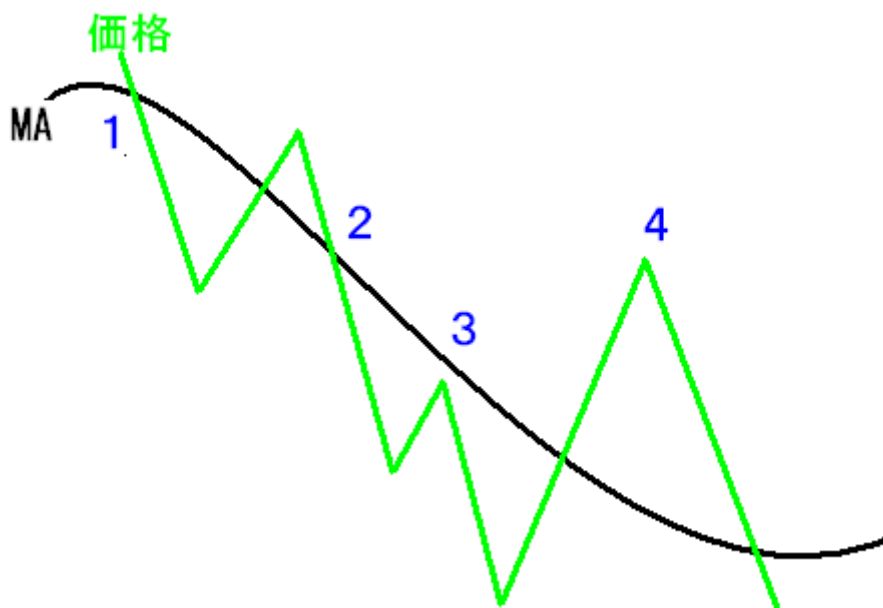
MA が上昇を続けている時に暴落し、MA から大きく下方乖離した場合、MA に向かって反発の可能性があるので買い。

この4つの法則から成り立ちますが、4番目の MA からの乖離を利用した逆張り、これは値動きの特性上、株式では有効に使用出来ますが、FXではかなり危険ですので、かなりの腕がない限りは使わないで下さい。

ですので、以上、1から3までの法則を使用します。

**【売りサイン】**

次に、売りサインを見て行きます。



売りポイントも4つあります。

**【1】トレンドフォロー**

上昇していた MA が下向き、あるいは、横這いとなった時に、価格の終値が MA



を下抜けしたら売り。

**【2】トレンドフォロー、戻り売り**

MA が下向きの時に、価格が MA を抜けて上昇したが、再び MA を突き抜けて反落、終値が MA を下回ったら売り。

**【3】トレンドフォロー、戻り売り**

終値が MA を下回って推移して、MA に近づく上昇を見せたが、結局、終値が MA を上抜かずに下落したら売り。

**【4】リバウンド、逆張り**

MA が下降を続けている時に急騰し、MA から大きく上方乖離した場合、MA に向かって反落の可能性があるので売り。

買いのパターンと同じく、4番目の MA からの乖離を利用した逆張りは、FX では危険ですので腕に自信がない限り使用しないでください。ですので、1 から 3 までの法則を使用します。

以上でグランビルの法則の基本は押さえました。

次に、「じゃあ移動平均線はどの数値を使えば良いのか?」、という問題になって来ます。

グランビルはこの法則を「200日移動平均線」で使用していました。200日なので、ちょっと長期過ぎます。

しかし、短期移動平均線の5、10等の設定では騙しが多過ぎる為、中期、または、長期移動平均線で使用するのが最も有効な使用方法だと思います。

先に推奨設定を載せておきます。時間軸は、60分以上でしたら、以下に掲げる数字、どれを使用しても構いません。

例えば、60分足で26本の線を使っても構いませんし、50本の線を使っても構いません。何故なら、大体、同じ数字にその時間軸に関係のある数字があるので、ここは自分の判断で使用して下さい。

131年を4で割ったもの

20一ヶ月の平均の平日

2460分足で丁度1日24時間

25一ヶ月の日曜だけを省いた数以前は週休二日制が普及しておらず、土曜は午前中半日は仕事でしたので、この数字になっています。

26半年

50約2日2ヶ月の日曜だけを省いた数海外でよく使用されるMAの設定値

100海外でよく使用されるMAの設定値

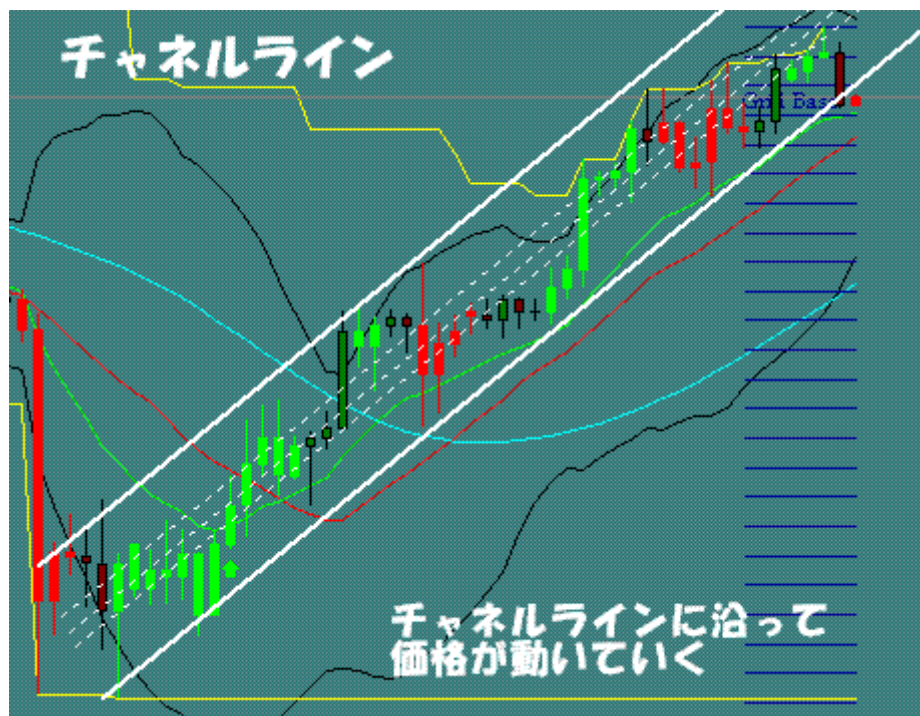
150海外でよく使用されるMAの設定値

200海外でよく使用されるMAの設定値

以上が一般的な移動平均線の数値です。

[▲目次へ戻る▲](#)

◆チャンネルライン



チャンネルラインとは、トレンドラインと平行なラインを上、または、下に引く事によって、そのトレンドライン上での今後のレンジ（値幅）予測に役立てる事が出来ます。

アップチャンネルラインは、アップトレンドラインと平行に直近高値に沿って引き、ダウンチャンネルラインは、ダウントrendラインと平行に直近安値に沿って引きます。

チャンネルラインもトレンドラインと同じように、3つ、4つと多くの点を結べるラインの方がより良い水準を示してくれます。

チャンネルラインの上のラインはレジスタンスを、下のラインはサポートを表します。

チャンネルラインはトレンドラインに対して平行線を引いただけなのですが、相場は一定のリズムを持って上昇、下降する事が多々あり、有効なトレンドラインに対して、平行なラインを引く事によって、その一定のリズムを捉える事が可能です。

■チャンネルラインの見方

- ・上昇トレンドラインのチャンネルラインは、レジスタンス（上値目標）
- ・下降トレンドラインのチャンネルラインは、サポート（下値目標）

上昇トレンドラインとそのアウトラインとで形成されるレンジを上昇チャンネル、下降トレンドラインとそのアウトラインで形成されるレンジを下降チャンネルと言います。

[▲目次へ戻る▲](#)

◆トレンド系テクニカル指標の代表格単純移動平均線

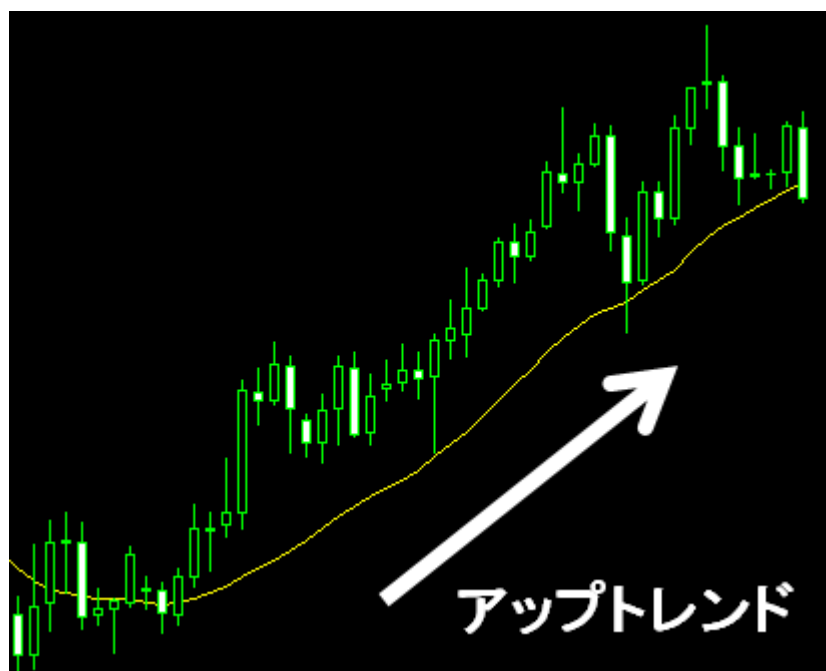
(SimpleMovingAverage、SMA)

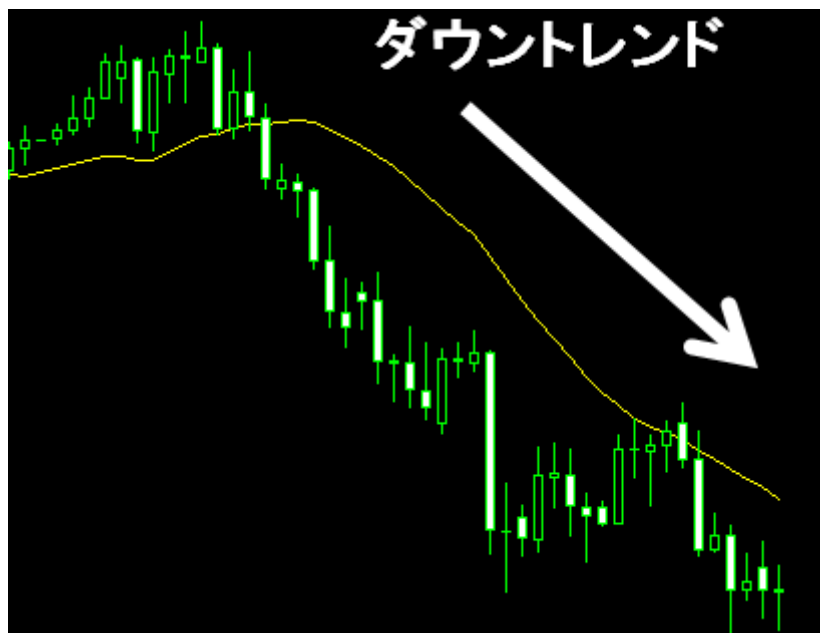
移動平均線はトレンド分析をするテクニカル指標のみならず、チャート全体の中でも最もポピュラーなものですので、初めての方は先ず最初に理解しておきましょう。

・移動平均線とは

移動平均線とは、為替レート過去の一定期間の終値の「平均値」を計算し、その値を繋いだライン（線）の事です。

そして、移動平均線の傾きが上向きなら「上昇トレンド（アップトレンド）」、下向きなら「下降トレンド（ダウントrend）」と判断出来ます。



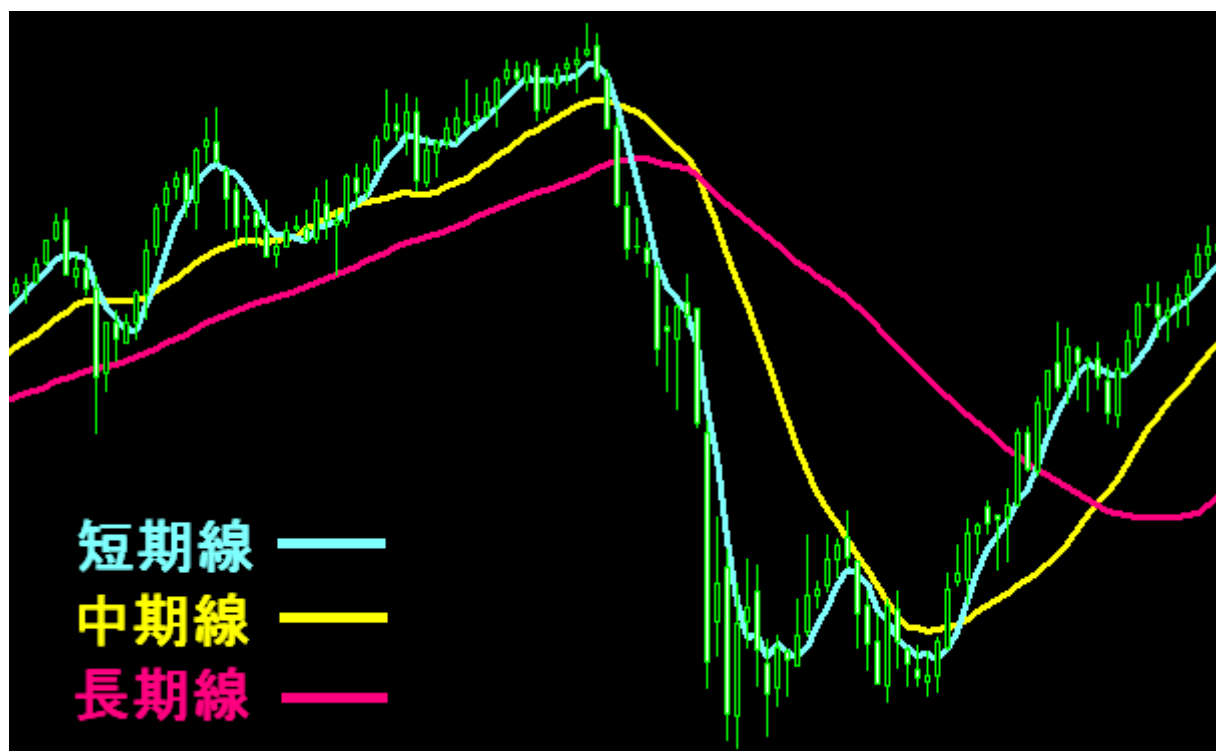


・移動平均線の基本

移動平均線は、平均する日数に応じて短期線、中期線、長期線に分類して使います。

移動平均線は、設定期間が短い程、直近の為替レートに、より近くなり、逆に、期間が長い程、長期的な流れを示すという性質があります。

この性質を利用し、「短期線」、「中期線」、「長期線」の3つの線に大きく分けて、それぞれを組み合わせる事でトレンドをつかむ事が出来ます。



#### ・平均レート数

平均する為替レートの数、確認したいトレンドの期間を基に営業日ベースで求めます。

例えば、中期的な視野で取引する場合は、日数単位で為替レートを計る「日足」を使い、短期を約3週間分の「15日」、中期を約5週間分の「25日」、長期を約15週間分の「75日」等に設定します。

また、長期的な視野で取引する場合は週単位で為替レートを計る「週足」を使い、短期を「13週（約3ヵ月）」、中期で「26週（約半年）」、長期で約1年にあたる「52週」等といった設定を行います。このように、それぞれのトレンドに合わせて移動平均線の設定を変えて使います。

#### 移動平均線で分析

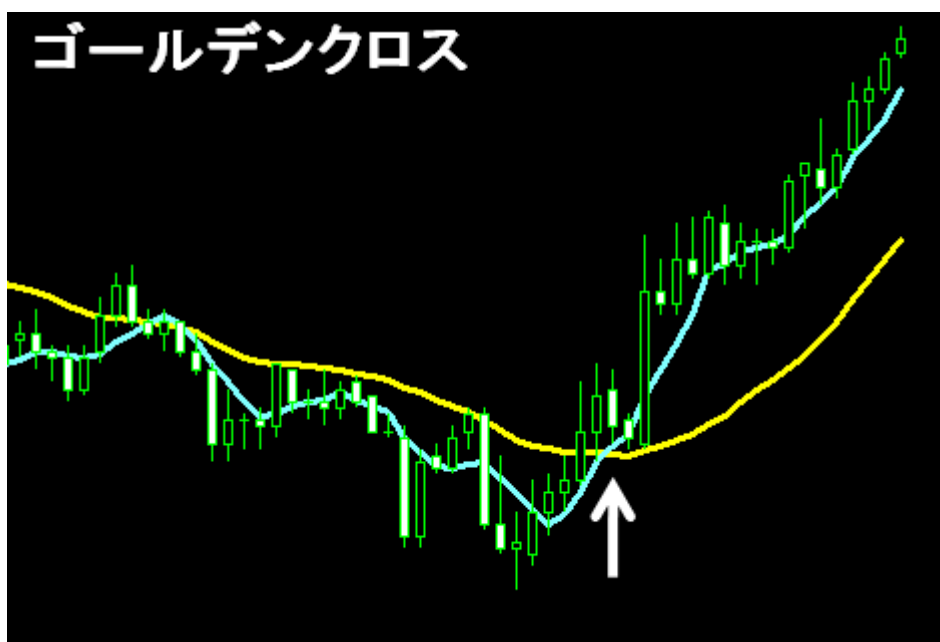
為替レートと移動平均線を組み合わせる事により、売りシグナルと買いシグナルを判断する方法等、幾つかありますが、移動平均線でメジャーな分析方法をご紹介します。

・買いの「ゴールデンクロス」、売りの「デッドクロス」

短期の移動平均線が上昇トレンドで、中・長期の移動平均線を下から上に抜けた時がゴールデンクロス。

逆に、短期の移動平均線が下降トレンドで、中・長期の移動平均線を上から下に抜けた時がデッドクロスとなります。

ゴールデンクロスが現れると通常、相場が「強気」である事を表し、一方、デッドクロスが現れると通常、相場が「弱気」であると判断出来ます。



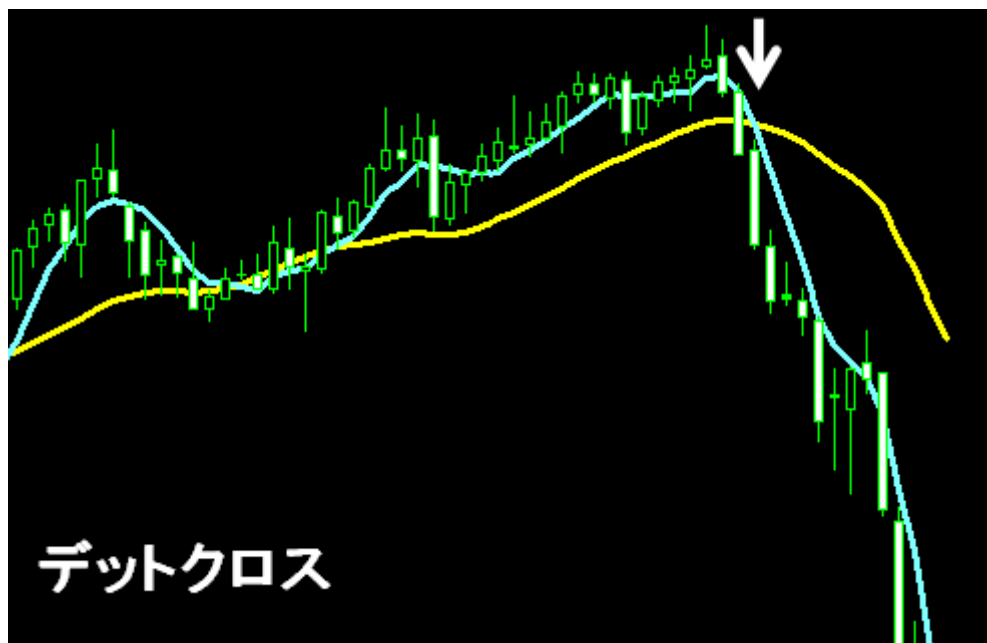
上のチャートの黄色の移動平均線（中・長期線）を水色の移動平均線（短期線）が下から上に突き抜けるように交差し、上昇しています。

白色の矢印の地点です。

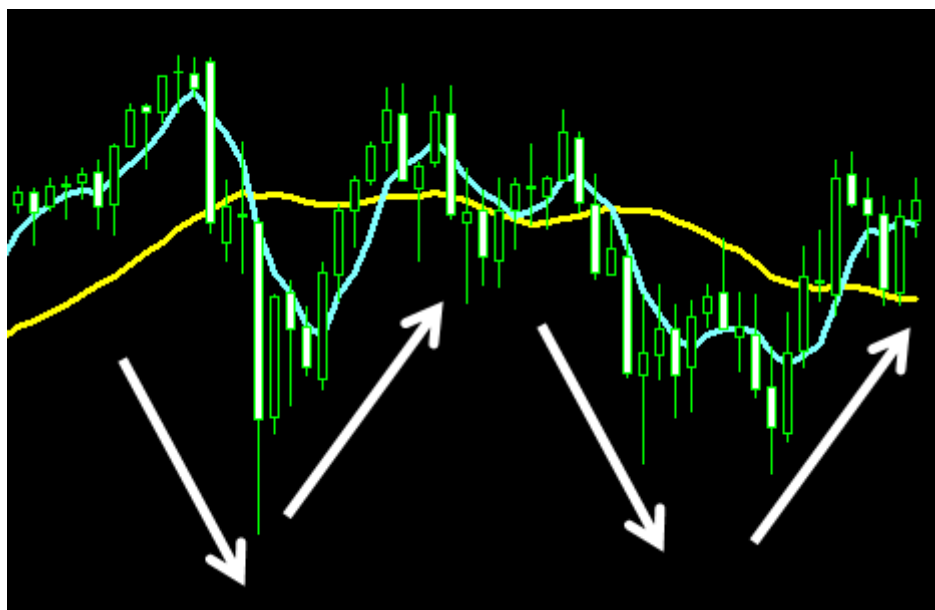
これをゴールデンクロスと言い、「買いサイン」と読み取ります。



逆に、黄色の移動平均線（中・長期線）を水色の移動平均線（短期線）が上から下に突き抜けるように交差し、下降するのをデッドクロスと言、「売りサイン」と捉えます。



移動平均線は大きなトレンドが出る、いわゆる「大相場に強い」と言われていますが、その一方、特にゴールデンクロスやデッドクロスによる分析の弱点として有名なものに、「揉み合い相場に弱い」という事が挙げられます。



揉み合い相場には上昇、もしくは、下落の大きな流れが存在していませんので、レートが平均値の近くをウロウロと漂い続けます。

移動平均線は過去の平均を計算して算出する事から、買いや売りのサインは少し遅れて出て来ます。揉み合い相場の中では、そのタイムラグによって売り時なのに「買いサイン」が、買い時なのに「売りサイン」が出る等して、反応にズレが生じ易くなります。

こうした**シグナルのズレを「ダマシ」と**言います。

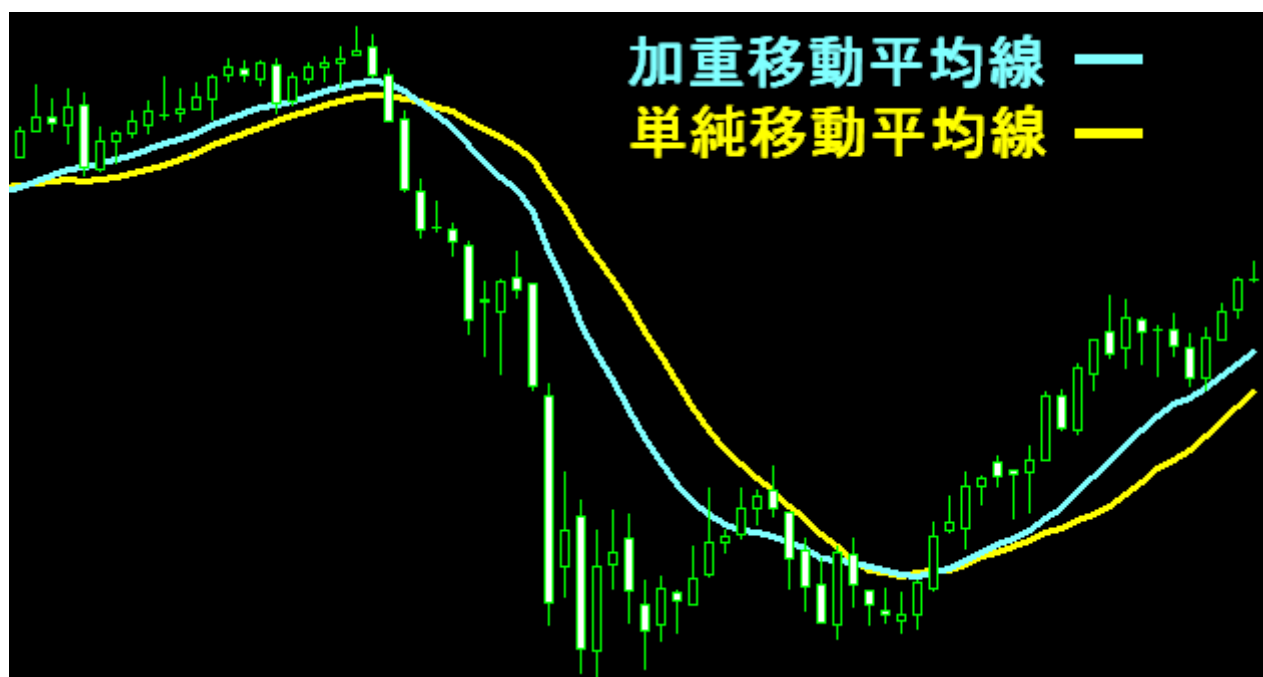
相場の方向性を見誤るものとして、注意が必要です。

[▲目次へ戻る▲](#)

◆加重移動平均線 (WeightedMovingAverage、WMA)

加重移動平均線の役目も、基本的には単純移動平均線と同様に、日々の不規則な変動を平準化し、トレンドの方向性を掴む事にあります。

単純移動平均線は価格データを単純に平均化するだけの移動平均線であるのに対し、加重移動平均線は直前の価格にウェイトを置いて計算する移動平均線です。



図を見て分かる通り、水色の MA (加重移動平均線) の方が単純移動平均線に比べ、少し反応が早く値動きを捉えています。

これは、直前の価格にウェイトを置く事によって、移動平均線が値動きに遅行しないようになっているからです。

直前の価格へのウェイトの置き方は、例えば、5日間の移動平均線の場合、5日目の価格を5倍、4日目の価格を4倍、・・・1日目の価格を1倍し、その合計を倍数の合計 (今回の例の場合は、 $5 + 4 + 3 + 2 + 1 = 15$ ) で割ります。この時の価格は単純移動平均線と同様に終値が用いられるのが一般的です。

C=当日の価格、C1 = 1 日前の価格、C2 = 2 日前の価格、C3 = 3 日前の価格、  
C4 = 4 日前の価格

5 日間の加重移動平均線 =  $\{(5 \times C) + (4 \times C1) + (3 \times C2) + (2 \times C3) + (1 \times C4)\} \div (5 + 4 + 3 + 2 + 1)$

移動平均線を利用するに当たり重要なのは、計算期間の選択、何日（または、何分）の移動平均線を使うのかという事です。

自分の投資スタイルが短期か中期か長期かによっても変わって来ますが、一般的には5日、25日、75日移動平均線をチャート上に描画し、短期移動平均線と長期移動平均線の位置関係等で売買するタイミングを計る方法がポピュラーです。

他にも移動平均線と価格の乖離に着目して売買する方法等もあります。

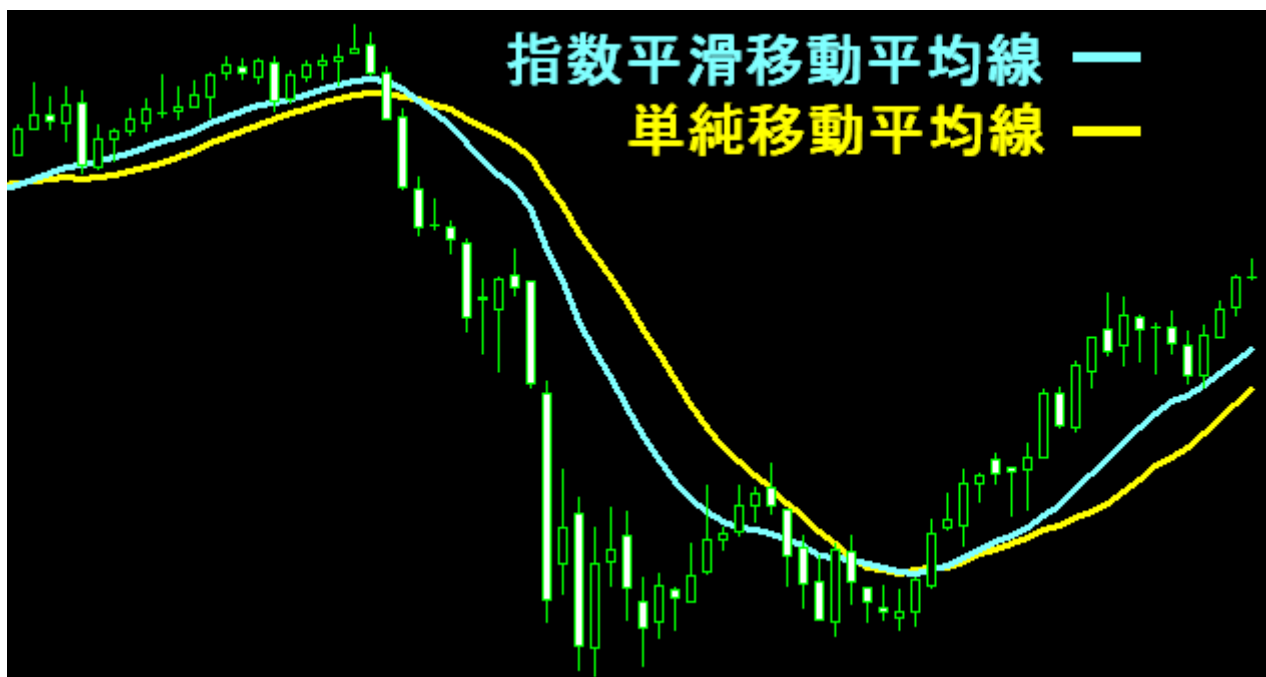
[▲目次へ戻る▲](#)

◆指数平滑移動平均線 (ExponentialMovingAverage、EMA)

指数平滑移動平均線の特徴は、加重移動平均線のように直前の価格にウェイトを置いて計算するのではなく、移動平均線全てのデータを平等に扱い、平均値を計算する所にあります。

100日単純移動平均線の場合は、100日前の数字も昨日の数字も平等に扱い、合計したものを100で割って計算します。

しかしながら、現在以降の相場変動を予想する上では、100日前の数字と前日の数字を平等に扱うのではなく、直近の値動きを重視し、過去の値動きを若干、軽視した方が、より精度の高い予想が出来ます。



指数平滑移動平均線はMACDに使用されていて、この移動平均線を知らず知らず使用している人は多いと思います。

[▲目次へ戻る▲](#)

◆エンベロープ (Envelope)

エンベロープは、移動平均線 (MA) の上下に同等率、または、同距離 (pips) のラインを引き、上下バンドを形成し表示します。



・売買ポイント

「買いシグナル」

価格が上バンドを上抜けた時。

上下揉み合い相場の場合、価格が下バンドに触れた時。

「売りシグナル」

価格が下バンドを下抜けた時。

上下揉み合い相場の場合、価格が上バンドに触れた時。

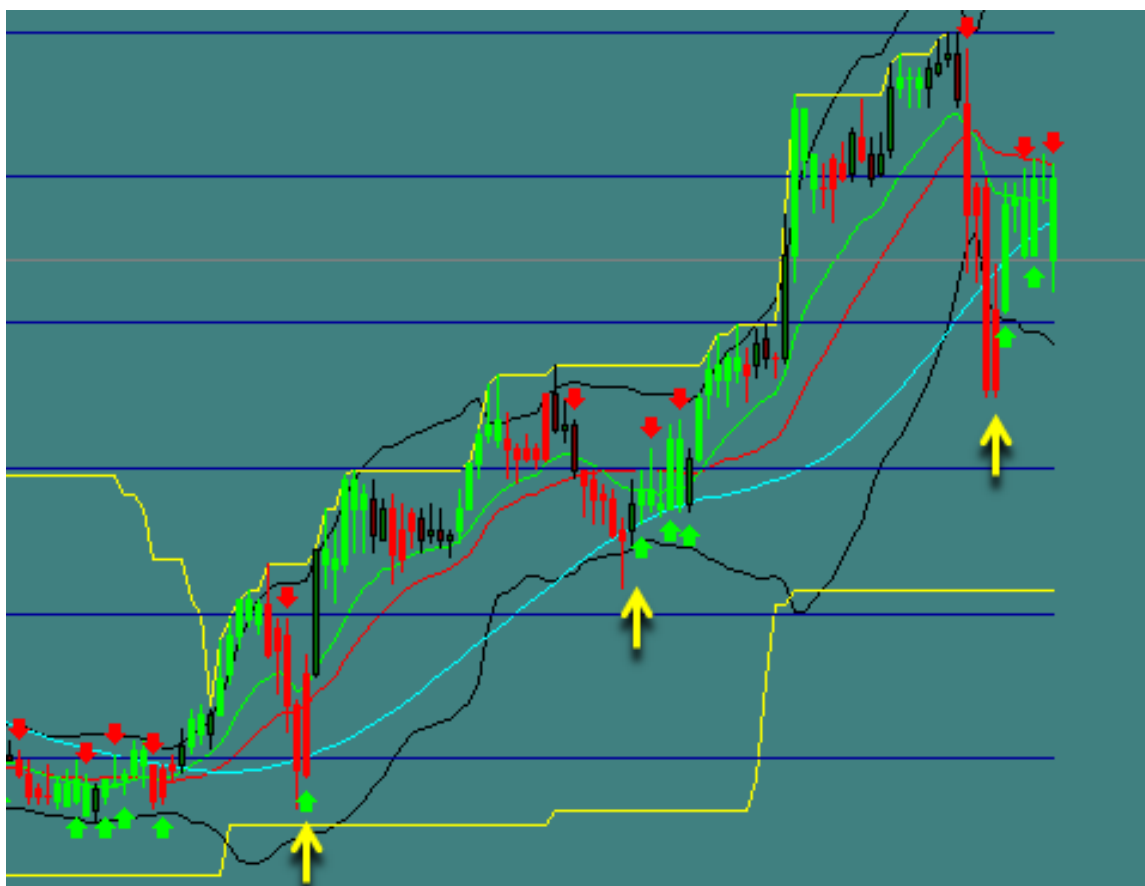
[▲目次へ戻る▲](#)

◆ T 3 移動平均線 (T 3 Moving Average、T 3 MA)

T 3 移動平均線は、Tim Tillson によって考案され、1998年1月版の”Technical Analysis of Stocks & Commodities article” における”Smoothing Techniques for More Accurate Signals” という記事で紹介されました。

T 3 MA は EMA (指数移動平均線) の曲線を更に滑らかなにしたものですので、SMA や EMA に比べてとても滑らかな曲線を描きます。

しかし、直近の価格を追いかける性質には向いていないので、大きな流れを探る為に使用します。



グランビルの法則と合わせて使用すると非常に有効なツールとして使う事が出来ます。

[▲目次へ戻る▲](#)

◆ボリンジャーバンド (BollingerBands)

ボリンジャーバンドは1980年代後半に JohnBollinger によって考案され、価格が「標準偏差」の「正規分布」に従うという仮定の下で、分析に統計学の概念を盛り込んだ指標です。現在、多くのトレーダーに利用される代表的なテクニカル指標の1つです。

ボリンジャーバンドには以下1～3の主な機能があります。

1. 価格変動の方向性を見つける
2. 価格変動の転換点を見つける
3. 価格が一方向に大きく変動する起点を見つける

この指標は「標準偏差」を用いて相場のボラティリティ（変動率）を計り、ボラティリティが高い期間（相場の変動が激しい時）にはバンド幅が広く、逆にボラティリティが低い期間（緩やかな時）にはバンド幅が狭く自動的に調整され示されます。

ボリンジャーバンドは価格変動の大部分を覆うように3本のバンドで構成され、中央バンドは一般的に「20期間単純移動平均線 (SMA)」を利用します。この中央バンドを基に上下バンドを描き、中央バンドと上下バンドとの距離はボラティリティによって自動的に変化します。

一般的に上バンドは「+2標準偏差 (+2σ)」、下バンドは「-2標準偏差 (-2σ)」を設定し、上下バンド内の価格正規分布確率は「95.44%」となります。

・売買ポイント

\*1. 価格が上下バンドに到達した（接近した）時が売買サインです。

\*価格が上バンドに到達した時に売り。

\*価格が下バンドに到達した時に買い。

\*2. 価格が上下バンドをどちらかに抜けた時が売買サインです。

\*価格が上バンドを上抜けた時に買い。

\*価格が下バンドを下抜けた時に売り。

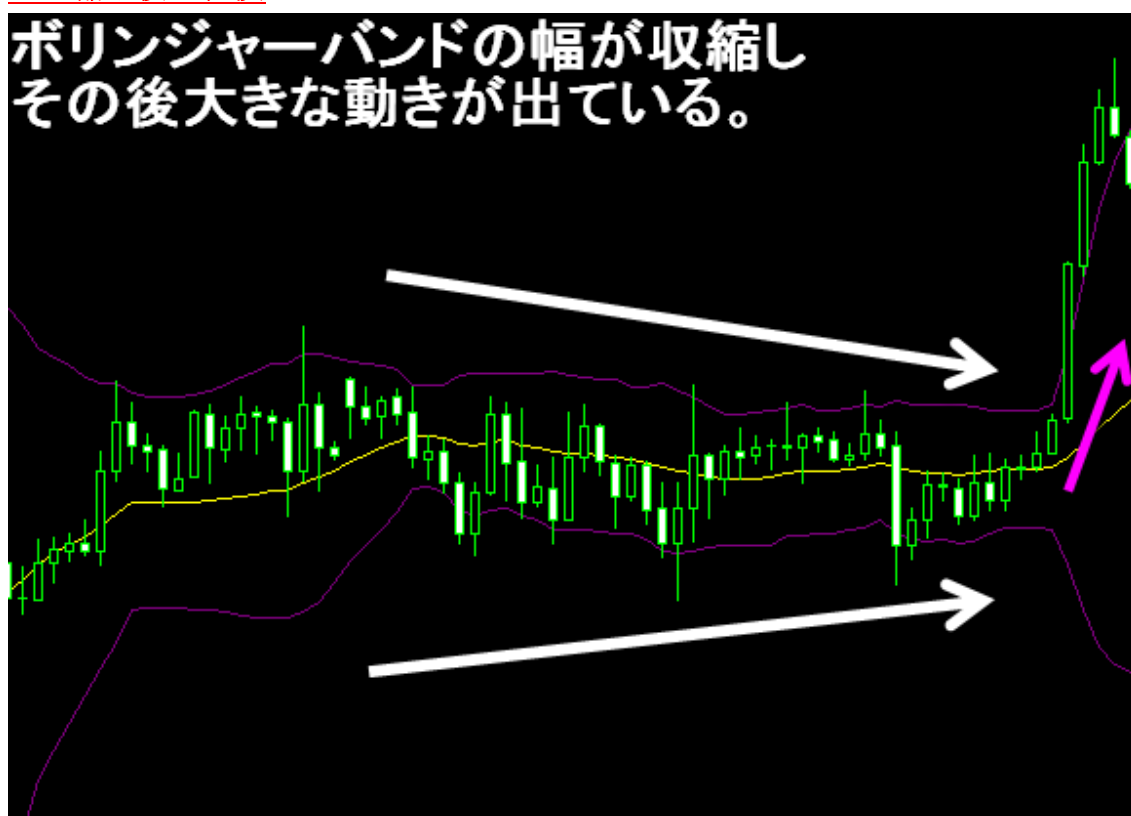


通常、ボリンジャーバンドは価格を利用して計算されますが、他の指標を使って、指標のベースとして算出される事もあります。ボリンジャー氏はボリンジャーバンドについて下記の事を述べています。

1. ボラティリティの減少により上下バンド幅が縮小した後、急激な価格変動が起きる事がある。(別名、“スキーズ”。)
2. 価格が上下バンドの外側に飛び出した場合には、その時のトレンドが続く可能性がある。
3. 上下バンドの外で生成されたボトムとトップに続いて、上下バンドの中でボトムとトップが生成された時には、トレンドの反転を示唆する。

それぞれのケースを見ていきます。

### 1. 縮小後の転換



ボラティリティの減少により上下バンド幅が縮小した後、急激な価格変動が起きる事がある。(別名 “スキーズ”。)

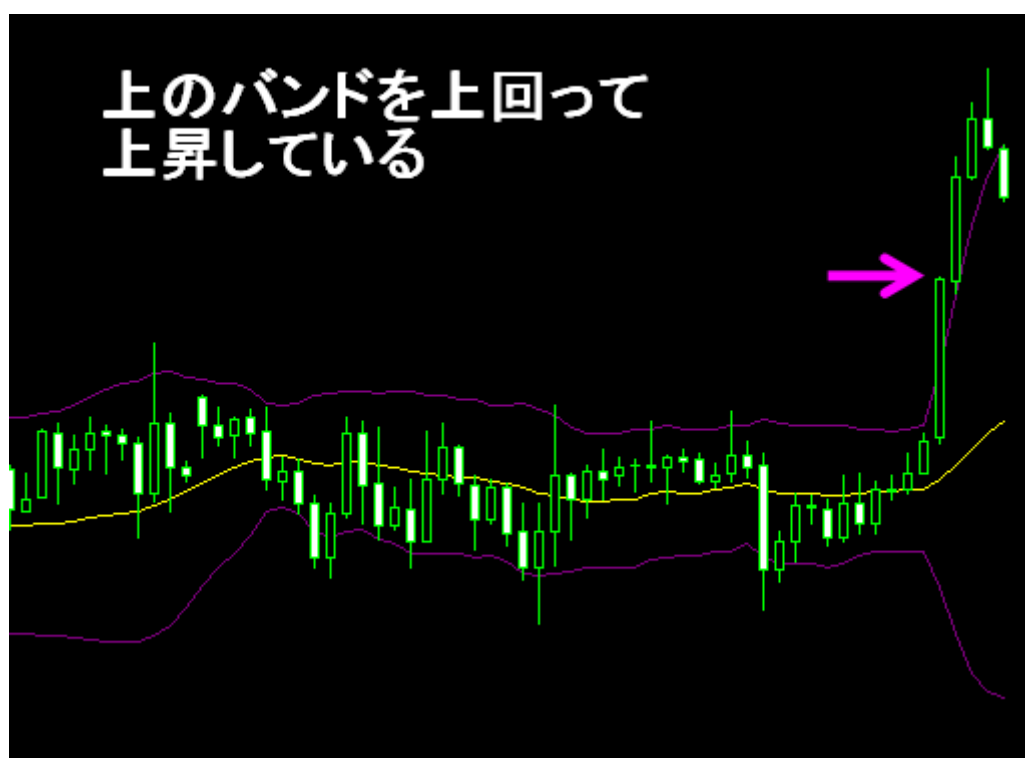
画像を見て分かる通り、ボリンジャーバンドの幅（上下の幅）が縮小し、相場が揉み合いになっています。ここを見分けるポイントは、ボリンジャーバンドのライン（上下紫色のライン）が横を向いている。これと同じく移動平均線（真ん中の黄色のライン）も横をむいています。

この時、どちらに動くかは本当に分からないので、このスクィーズが起きている状況ではポジションを絶対には取ってはいけません。

大きな動きが出る可能性が非常に高いので、方向がしっかり分かってから仕掛けても全く遅くはありません。

ですので、このスクィーズが起きている状況ではポジションを絶対には取らないようにしましょう。

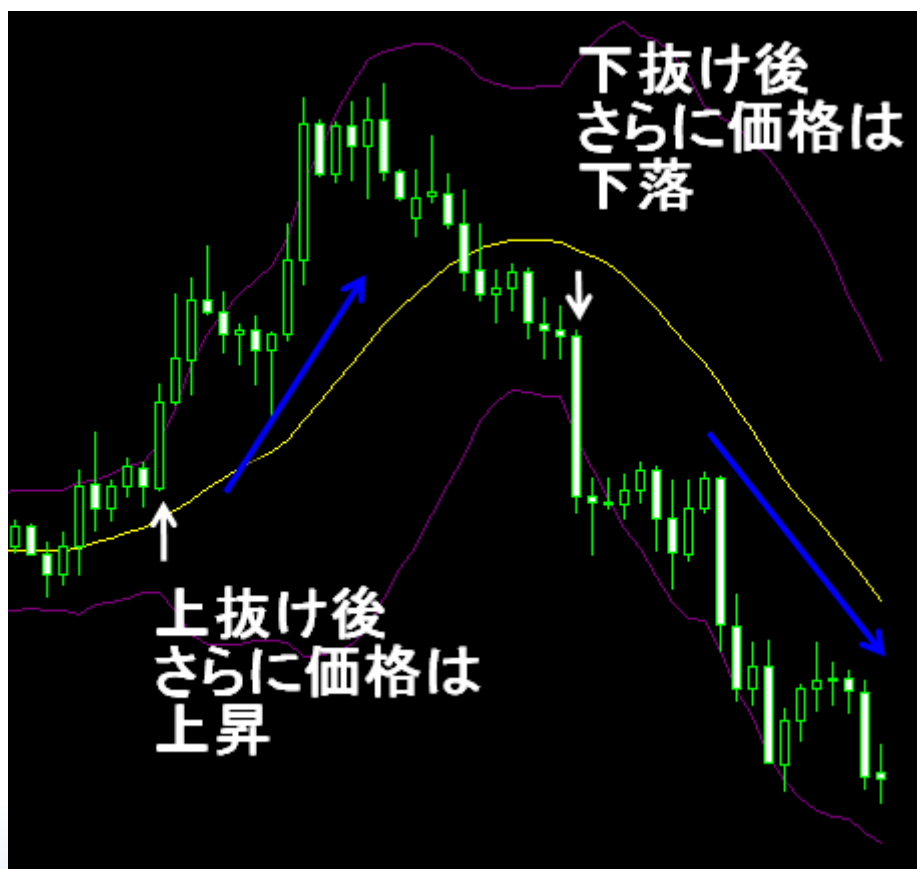
## 2. 外に飛び出した後のトレンド継続



画像のように価格が上下バンドの外側に飛び出した場合には、その時のトレンドが続く可能性があります。その後、更に価格は上昇して行きました。



他の場所でも見てみます。



ボリンジャーバンドを抜けるのが合図となり、さらにその抜けた方向へと相場が動いています。

このようにバンドを抜ければ、その抜けた方向へと相場が動く場合が非常に多くありますので、このパターンを絶対に覚えておいて下さい。

### 3. ボトムトップ生成後のトレンド反転



上下バンドの外で生成されたボトムとトップに続いて、上下バンドの中でボトムとトップが生成された時には、トレンドの反転を示唆しています。

画像の場合、ダウントrendが出来ていて、その後、下のバンドを抜け、再度上昇しています。その後、下落はありましたが、そこから新しいアップトレンドが出来ています。

このようにトレンドが転換する時にもこのボリンジャーバンドは有効に使用出来ます。

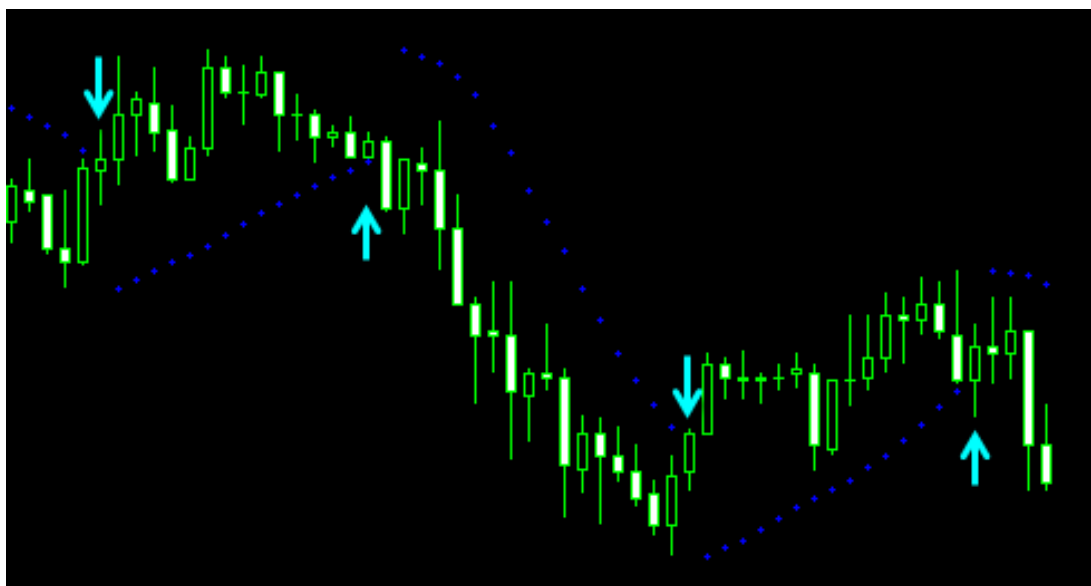
[▲目次へ戻る▲](#)

◆パラボリック・SAR (Parabolic SAR)

パラボリック・SARはWelles Wilderによって考案された指標で、チャートにトレーリングするストップポイントを表示し、一般的にはSAR(ストップ・アンド・リバーズ)と呼ばれています。詳しい内容はWilderの著書、“New Concepts in Technical Trading Systems”に記載されています。

価格がSARを上を抜けたら「売りポジション決済」、下を抜けたら「買いポジション決済」としてトレーディングを行なう事により、SARは明確なストップポイントとして利用する事が可能です。

パラボリックは大きなトレンドを形成している相場には有効ですが、ボックス内で推移している場合に売買のサインが遅れてしまい、あまり役に立ちません。他のオシレーター系の指標と組み合わせて使うと良いでしょう。



・売買ポイント

「買いシグナル」

価格がSARを上抜けた時。

「売りシグナル」

価格がSARを下抜けた時。

このパラボリック・SARはトレード開始ポイントではなく、決済ポイントのみに使用すると比較的、有効に使用出来ます。

トレーリングストップをこのパラボリック・SARの値ごとに動かしていく使用方法が、このパラボリック・SARを上手く使いこなす方法です。

[▲目次へ戻る▲](#)

◆アベレージ・トゥルー・レンジ (AverageTrueRange、ATR)

アベレージ・トゥルー・レンジ (ATR) は相場のボラティリティ (変動率) を示す指標で、1978年にWellesWilderの著書、“NewConceptsinTechnicalTradingSystems”によって発表されました。

この指標は価格の方向性や持続期間とは関係なく、ボラティリティを示します。トゥルーレンジ (TrueRange) は、下の1～3のうちの最大値を取ります。

1. 【現在の高値－現在の安値】
2. 【現在の高値－前期間の終値】
3. 【現在の安値－前期間の終値】

ATRはトゥルー・レンジを平滑化する事によって求められます。



平均値幅を求めていますので、このATRの値をストップロス (損切り注文) の幅に使用する方法が有効に活用する一般的な方法です。

[▲目次へ戻る▲](#)

◆ケルトナー・チャネル (KeltnerChannels)

ケルトナー・チャネルは ChesterW.Keltner によって考案され、1960年に “HowtoMakeMoneyinCommodities” で紹介されました。

「ボリンジャー・バンド」は標準偏差を利用して相場のボラティリティ（変動率）を測定しますが、ケルトナー・チャネルは「ATR」を利用し、相場のトレンドを予想します。

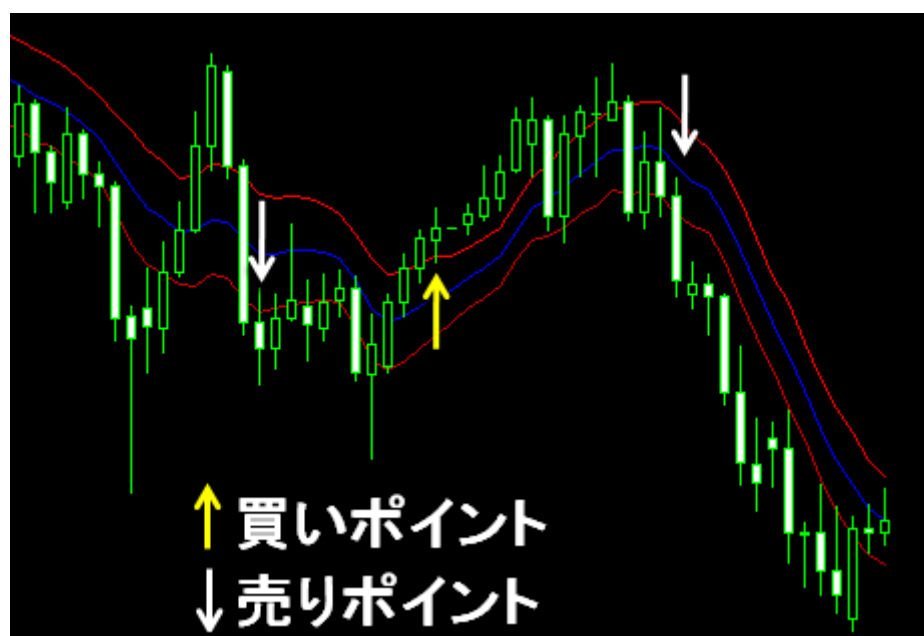
「RSI」や「MACD」のオシレーター系テクニカル指標と併せた使用が効果的です。

1. 中央バンド⇒【ティピカル・プライス n 期間単純移動平均線 (SMA)】
2. 上バンド⇒【中央バンド+高値 n 期間単純移動平均線 (SMA)】
3. 下バンド⇒【中央バンド-安値 n 期間単純移動平均線 (SMA)】

・売買ポイント

「**買い**」 価格が上バンドを上を抜けた時、強い上昇トレンドとみなし買い。

「**売り**」 価格が下バンドを下を抜けた時、強い下降トレンドとみなし売り。



[▲目次へ戻る▲](#)



◆一目均衡表 (IchimokuKinkoHyo)

一目均衡表は、「一目山人」というペンネームの新聞記者、細田悟一によって1936年に考案された指標です。

「波動」、「時間」、「水準」の概念を総合的に取り入れたチャートで、相場のバランスを視覚的に表現したものです。

他の指標と比べての大きな特徴の一つとして、「時間」の概念を取り入れている事が挙げられます。価格の方向性と、市場へのエントリー、または、決済ポイントを見つける為に向いている指標です。

※それぞれのラインは以下の式によって求められます。

転換線 = 【過去9期間のロウソク足の (最高値 + 最低値) / 2】

基準線 = 【過去26期間のロウソク足の (最高値 + 最低値) / 2】

遅行スパン = 【本日の終値を26期間のローソク足分、過去にずらしたもの】

先行スパン A = 【{(転換線 + 基準線) / 2} を26期間のロウソク足26分、先にずらしたもの】

先行スパン B = 【{(過去52期間のロウソク足中の最高値 + 最低値) / 2} を26期間のロウソク足分、先にずらしたもの】

雲 = 先行スパン A と先行スパン B の間の空間

・売買ポイント

\*・基準線・転換線を見る。

【基準線】に対して【転換線】が下から上へと突き抜けた場合→ゴールドクロス  
ロス=買い。

【基準線】に対して【転換線】が上から下へと突き抜けた場合→デッドクロス  
=売り。

※基準線・転換線はサポート・ラインとしても用いられます。

**\*・先行スパンを見る。**

先行スパン2本の間を「雲」と呼び、これを支持帯あるいは抵抗帯と見ます。

相場が先行スパンの雲を上を突き抜けた場合→相場は好転したと判断し、ここを買い。

相場が先行スパンの雲を下を突き抜けた場合→相場は暗転したと判断し、ここを売り。

相場が先行スパンの雲を通過する時に、それまでの方向に対して抵抗を示す場合があります。

また、雲のねじれの上や下を値動き（ローソク足）が通過する時、相場に波乱が生じる可能性が大きいと言われます。

**\*・遅行スパンを見る。**

26期間過去の相場そのものと現在の相場を比較し、その位置関係によって買い、売りを判断します。

26期間過去に遡った時点の相場を【遅行スパン】が下から上に突き抜けた場合→買い。

26期間過去に遡った時点の相場を【遅行スパン】が上から下に突き抜けた場合→売り。

遅行線が過去の相場に近づいて行き、ほんの少し抜けた所から逆に跳ね返されるケースがあります。

突破出来なかったとなると下落基調を辿るとされており、逆に、26日前の相場を上から下抜けた場合は売りポイントとなり、抜けなければ強気相場の継続を暗示します。



[▲目次へ戻る▲](#)

■ (3) オシレーター系テクニカル指標

オシレーター (Oscillator) とは、どういう意味でしょうか？

オシレーターとは「振り子」という意味です。

オシレーター系テクニカル指標は振り子のように上下に振れ、相場の買われ過ぎ、売られ過ぎを示す指標となります。

[▲目次へ戻る▲](#)

◆MACD (MovingAverageConvergence/Divergence)

MACD は GeraldAppel によって考案され、“Systems&Forecasts” で発表されました。

この指標はモメンタム系とトレンド系の2つの特性を兼ね備えており、通称、MACD (マックディー、もしくは、エムエーシーディー) として、今日では多くの人たちに利用されています。

基本的な設定として「12期間指数移動平均線 (EMA)」と「26期間指数移動平均線 (EMA)」との差分を Fast ライン (MACD ライン) として表し、Fast ライン (MACD ライン) の「9期間指数移動平均線 (EMA)」を Signal (Trigger) ラインとして表します。

・売買ポイント

MACD は主にトレンド系の指標として、相場が大きく動いている時にその効果を発揮します。

MACD と価格の乖離度から、現状の相場が転換する可能性と値動きにおけるトレンド継続ポイントを判断する事が出来ます。

「買いシグナル」

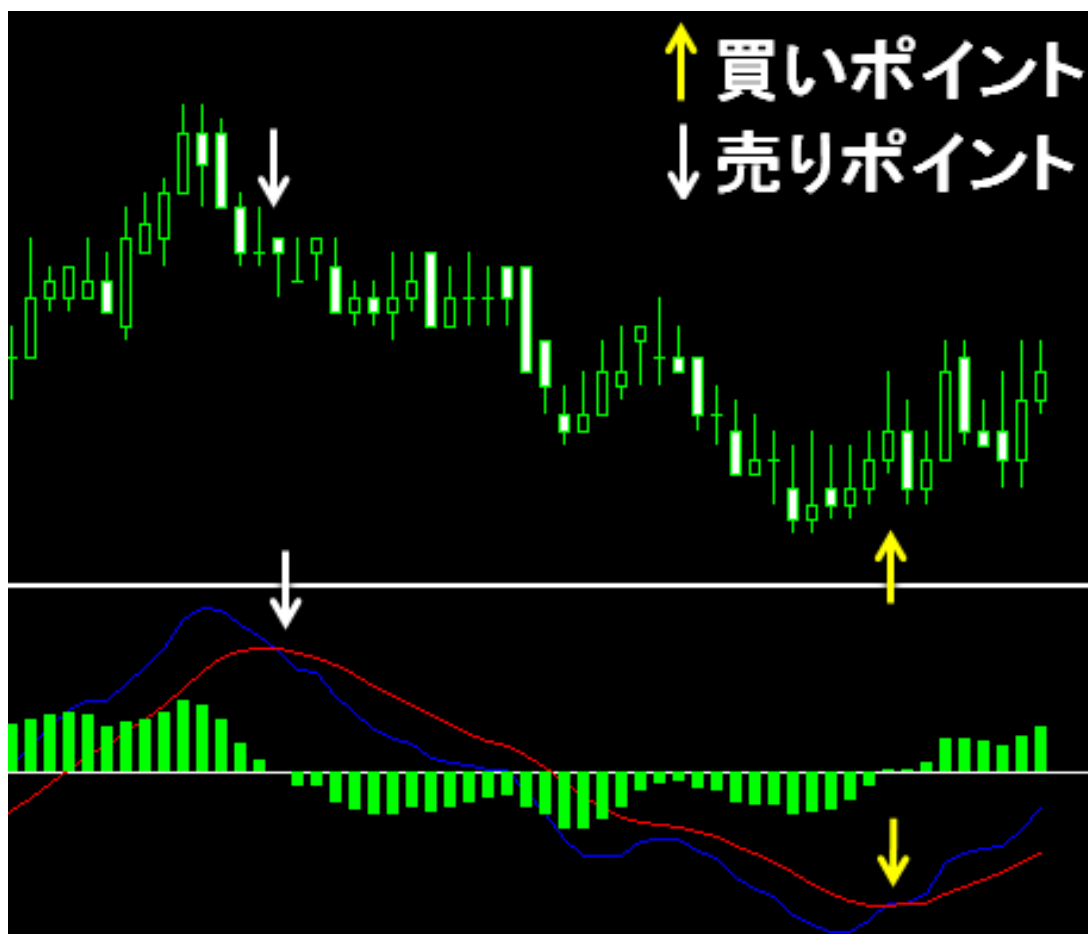
価格が底にある状態で Fast ラインが上向いた時。

Fast ラインが Signal (Trigger) ラインを下から上抜けた時 (この時、両ラインが0を上回っていると理想的な買いシグナル。)

「売りシグナル」

価格が天井にある状態で Fast ラインが下向いた時。

ラインが Signal (Trigger) ラインを上から下抜けた時 (この時、両ラインが0を下回っていると理想的な売りシグナル。)



先ず、この指数移動平均線とは何か？という事を説明したいと思います。  
簡単に言うと、移動平均線のノイズを減らして、現在に近い時間の値動きに比重をおいて、今後を考える。そんな指標です。

↓MACDについて、詳しく知りたい方だけ続きをご覧ください。↓

EMA（指数移動平均線）は単純移動平均線とは違い、近日の値を離れた日よりも優先して反映させるので単純移動平均に比べて市場の変化により早く反応します。

MA の算出式は以下のようになっています。

$$EMA = P \times \alpha + Ey \times (1 - \alpha)$$

P: 本日の値

$$\alpha : 2 / (n + 1)$$

n: EMA を計算する日数

Ey: 前日の EMA (第一回目の計算に限っては前日の MA を取る。)

例えば、10 日間の EMA を算出する場合、直近の終値は EMA の値のうち 18% を占める事になります。

何故なら、この場合  $n = 10$  ですので

$$\alpha = 2 / 11 \doteq 0.18 \text{ (18\%)}$$

となり直近の終値である P に  $\alpha$  (18%) が掛かっている為です。

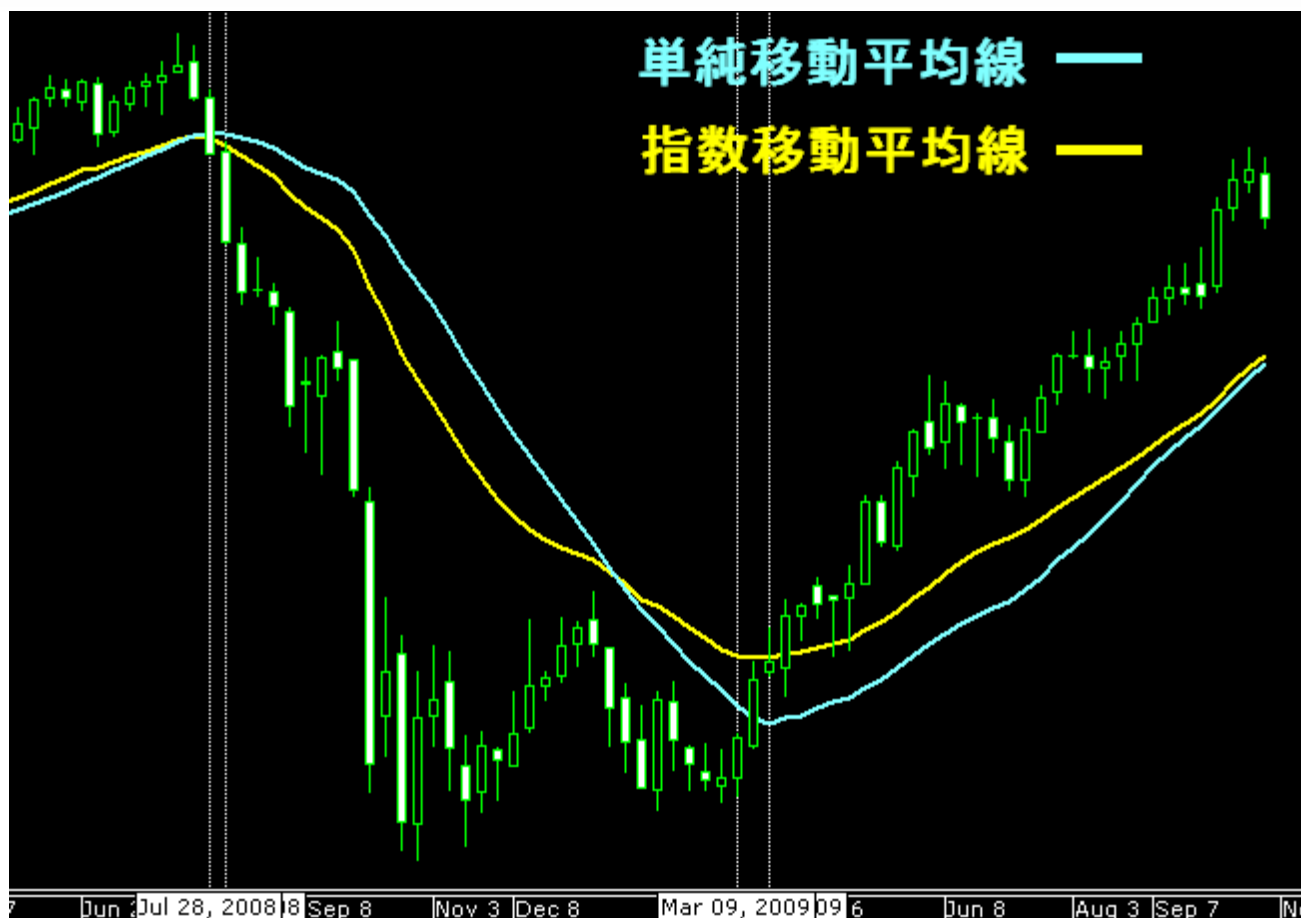
残りの 82% は昨日までの EMA に比重が置かれています。

これが単純移動平均だと、 $n = 10$  とすれば、全ての日数に 10% ずつ比重が掛かります。

まあ、分からなくても良いと思います。

とにかく、有効に作用するものとさえ覚えておけば良いでしょう。

さて、それではこの指数移動平均線と単純移動平均線はどれくらい違うのか実際に見てみましょう。



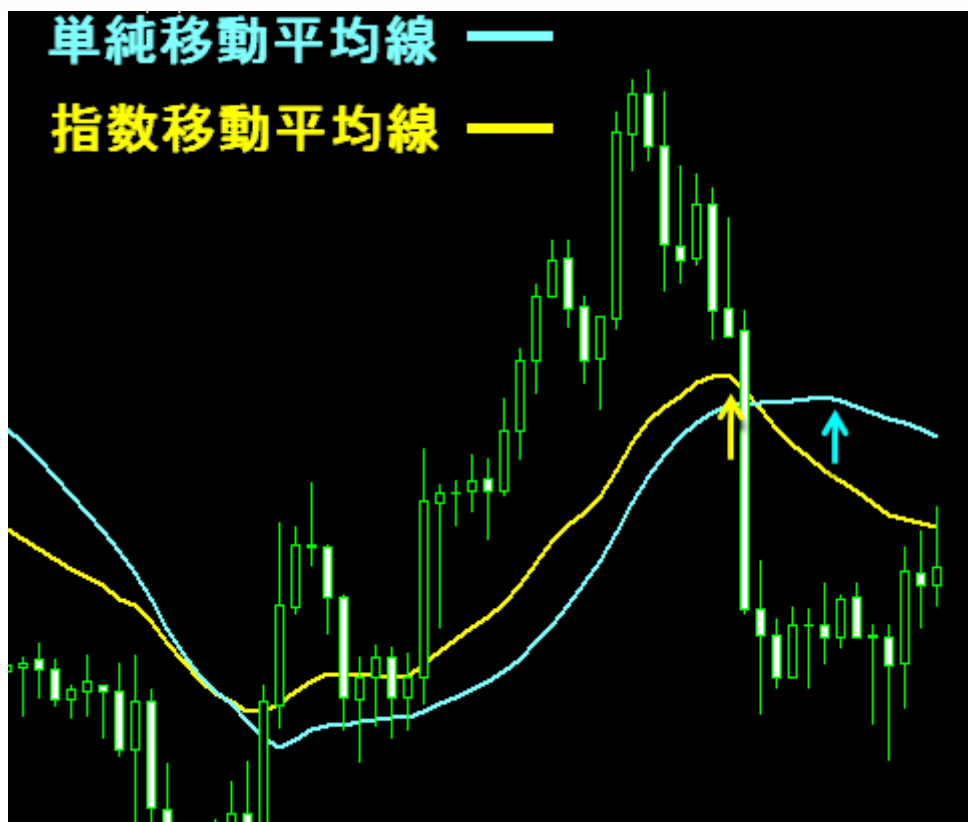
単純移動平均線が水色指数移動平均線が黄色です。

移動平均線の方角だけで見ると、単純移動平均線よりも指数移動平均線の方が少し価格に対して反応は早くなっています。

画像は週足なので、2本分（2週間）早くこのトレンドの変化を捉えていた事になります。

もう1つ見てみます。





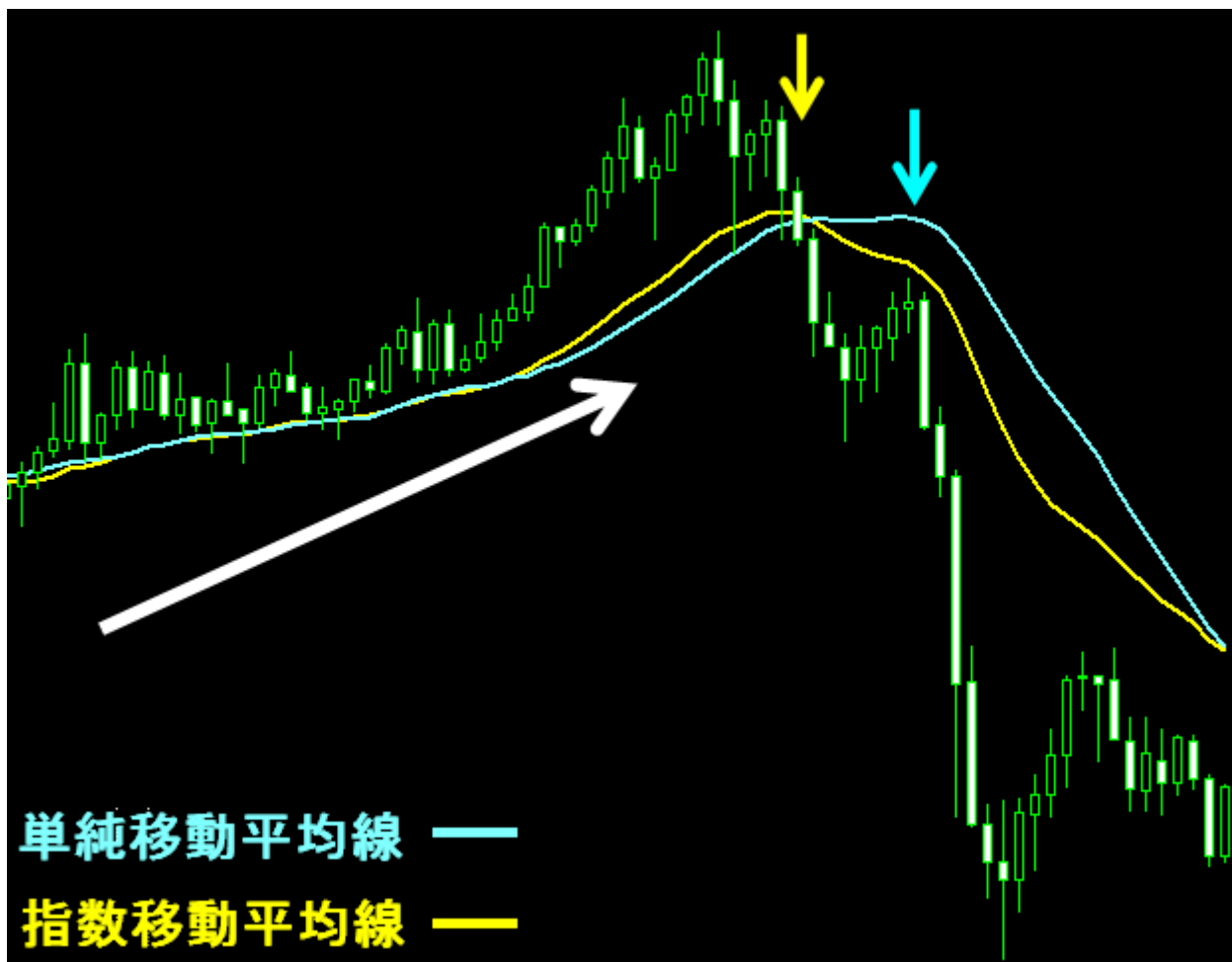
こちらでは、一つ上の場合よりも早く指数移動平均線が変化しています。

この原因は、指数移動平均線の特徴である、現在に近い時間の値動きに比重を置いているので、その前のトレンドが長いほど、単純移動平均線よりもはやく変化を捉えられるからです。

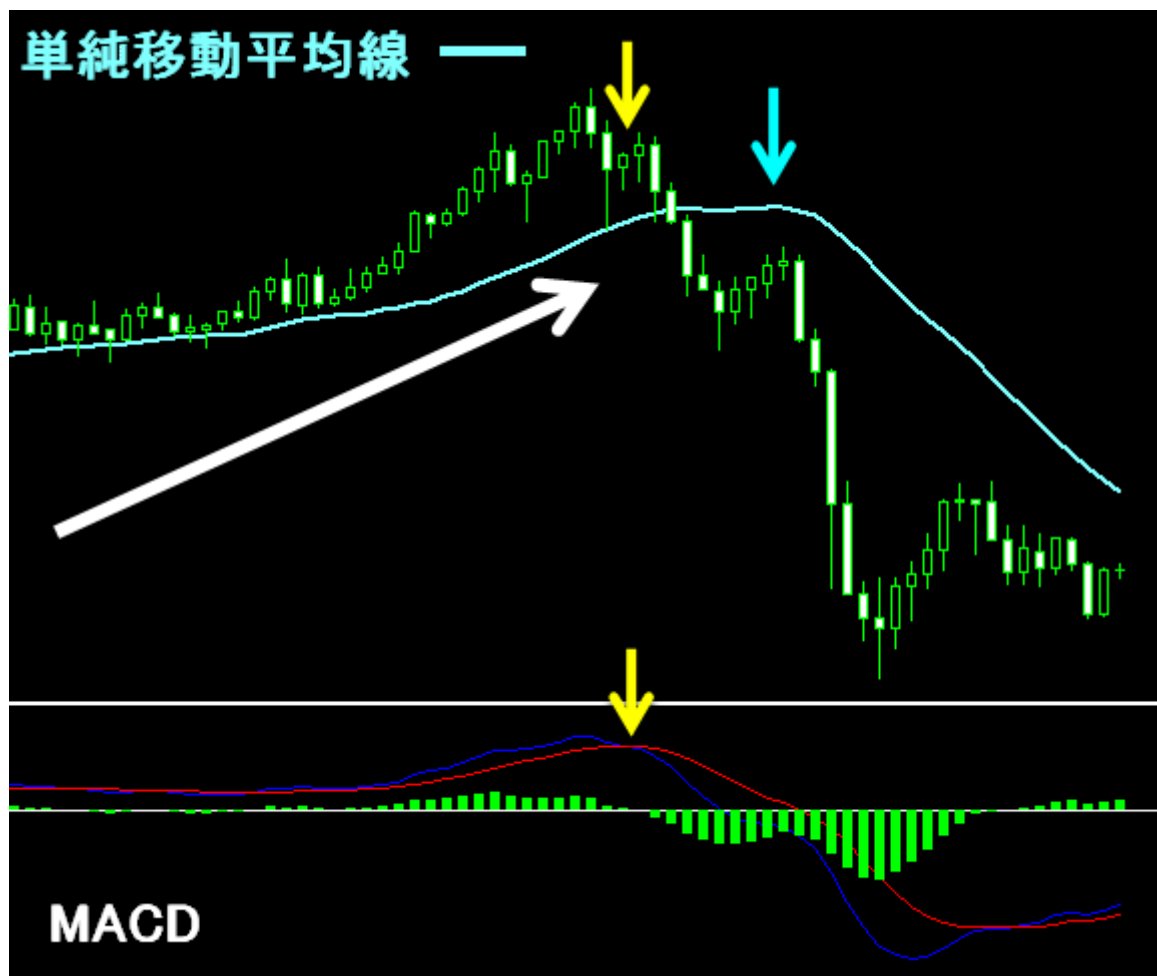
トレンドが続いた時程、単純移動平均線よりも指数移動平均線の動きに注意を払う必要があるという事です。

ですので、MACD も同じで、トレンドが続いた時程、単純移動平均線よりも MACD の動きに注意を払う必要があるという事です。

長いアップトレンド後からダウントrendへの転換のサイン。



単純移動平均線と指数移動平均線が下がるタイミングの違い。



単純移動平均線が下がるタイミングと MACD の転換のサインの違い。

このように単純移動平均線よりも早く転換のサインが出ます。  
ですので、MACD が転換したら、移動平均線の方向へ向かったのトレードは非常に注意しなければなりません。

既に出てきているトレンドの終わりを探る時、これから始まるであろうトレンドの開始を探る時、この MACD は有効に使用出来ます。

しかし、移動平均線が使えない訳ではなく、上の図で見ても分かる通り、移動平均線が下向きになってから本格的な下落が始まっています。

確かに MACD は値動きを移動平均線よりも先取りして教えてくれますが、やはり基本は移動平均線です。



他の場所でも見てみます。

左から、先ず MACD が売り転換を見せましたが、さほど下落はしません。  
ここでの MACD の役割は移動平均線よりも先取りして、トレンドの転換を教えてくれる事にあります。その後、移動平均線が下がり、それと共に価格の下落も始まりました。

また、その後、MACD は買い転換を見せ、価格も上昇に転じましたが、大した上昇にはなりませんでした。

何故か？、はもう分かると思いますが、移動平均線はまだ下落の中にあるからです。

MACD が買い転換、売り転換したからと言って、それが続く条件は MACD にはありません。その後、移動平均線の動きに注意しなければならないのです。

移動平均線を結構、長い間、説明しましたが、もう一度おさらいすると、移動平均線で重視する点はゴールデンクロス、デッドクロスではなく、「移動平均線の向き、移動平均線に対してどちらに価格があるのかが重要」ですが、MACD の場合は「ゴールデンクロス、デッドクロスが重要」になってきます。



MACD がゴールデンクロスした後、大分、遅れて移動平均線は上向きになっています。

これだけ見れば MACD は使えるという判断が出来ますが、移動平均線だけでも十分とも言えます。

MACD の性質である移動平均線よりも先取りして相場の転換を教えてくれる、というのが、この MACD の強みですが、その先取りが逆効果になってしまう状況もあります。

例えば、画像で見ても MACD がゴールデンクロスをしてから相場が本格的に上昇するには、時間が掛かっています。

重要なのは、MACD は使えるのか使えないのかという事ではなく、その性質を上手く利用しなければならないという事です。



簡単に2つのパターンに分けてみます

- ①MACD と MA の方向が同じ「トレンドが出来ている」
- ②MACD は転換、MA の方向と逆「トレンドが出来ていない」

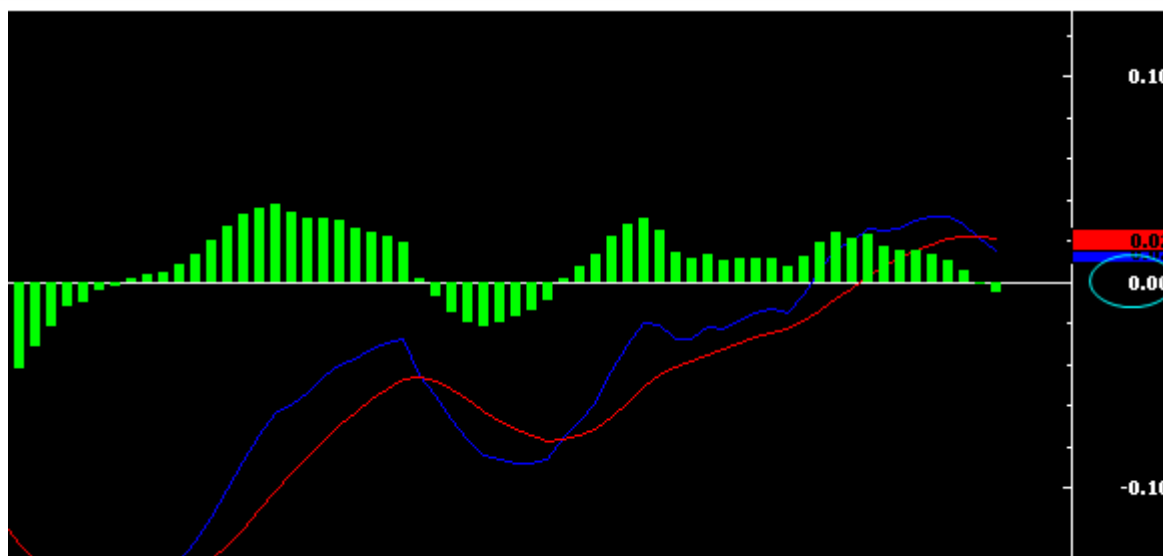


MACD と MA の方向が同じ「トレンドが出来ている」

MACD は転換、MA の方向と逆「トレンドが出来ていない」

単純にこうやって2種類に分けただけでも、見え方は違ってくると思います。

今はトレードをして良いのか、もしくは、注意しなければならないのか、待つ時なのか。



次に MACD でゴールドクロス、デッドクロス以外に見る所は、0 ラインです。

画像の一番右にある水色の丸の部分、このラインより上はアップトレンド傾向、このラインより下はダウントrend傾向と見ます。

MACD のラインの遅行線（画像では赤色のライン）が 0 ラインを上抜いたら、更に上昇、逆に 0 ラインを下抜いたら、更に下落と見る事が出来ます。

勿論、0 ラインを上抜く時はゴールドクロス後ですし、0 ラインを下抜く時はデッドクロス後です。

ですので、ゴールドクロス後、0 ラインを上抜いた時、この場合、買いの明確な定義が出来る場所が 2 つ出来る事になります。

逆に、デッドクロス後、0 ラインを下抜いた時、この場合も、売りの明確な定義が出来る場所が 2 つ出来ます。



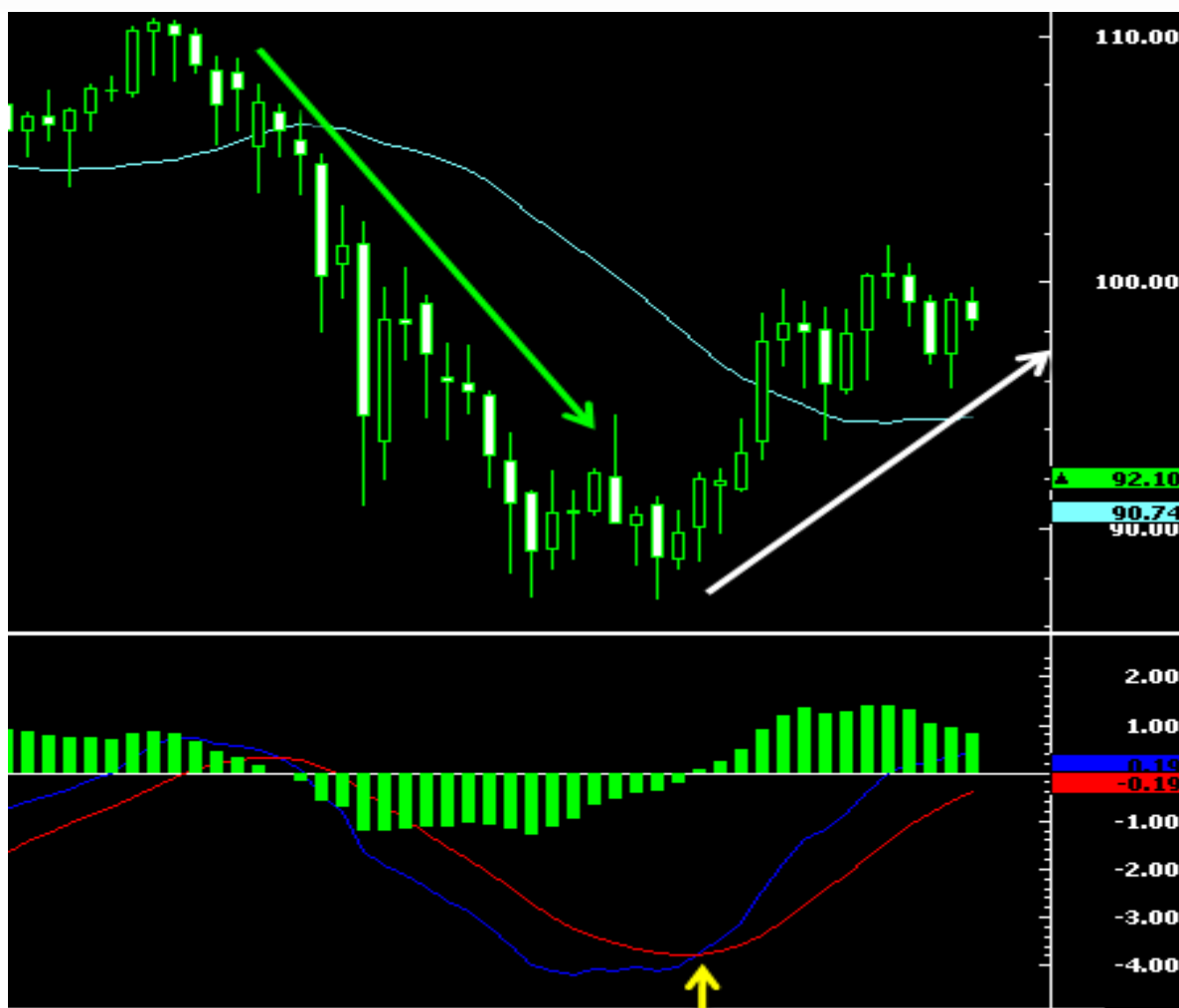


実際に見てみます。MACD がゴールデンクロスをした後、0ラインを上抜いています。ゴールデンクロスでは今から上昇になるのではないか？、という判断が出来、その後、0ラインを上抜けば、本格的な上昇が始まる可能性が出てきます。

この0ラインを上抜いた時（下落の場合なら下抜いた時）は、ほぼ MA（画像の MA は26本）の向きが転換すると同時に出てきますので、先ほどの MA と組み合わせるのではなく、MACD 単体で見るとは、このクロス後の0ライン転換をサインにしてもいいと思います。

この0ラインでトレンドを見分ける時もう一つ明確に定義出来るものがあります。

- ・ 0ラインより下でのゴールデンクロス、0ラインより上でのゴールデンクロス
- ・ 0ラインより下でのデッドクロス、0ラインより上でのデッドクロス



画像で見ると、トレンドがダウントレンドからアップトレンドへと転換する時に、0ラインより下でのゴールデンクロスが出来ます。

トレンドが転換する時に出る訳ですから、このMACDのゴールデンクロスはトレンドの転換を示しています。

次に0ラインより上でのクロスはどうでしょう。



トレンドはアップトレンドが継続しています。押し等があった時、デッドクロスをして、もう一度0ラインより上でのゴールデンクロスが出来ます。

トレンドが継続する時に出る訳ですから、このMACDのゴールデンクロスはトレンドの継続を示しています。

### 【まとめ】

#### ・移動平均線との違い

移動平均線で重視する点は、「移動平均線の向き、移動平均線に対してどちらに価格があるのが重要」だが、MACDの場合は「ゴールデンクロス、デッドクロスが重要」。

#### ・MACDはMAと組み合わせて見る。

MACDとMAの方向が同じ「トレンドが出来ている」

MACDは転換、MAの方向と逆「トレンドが出来ていない」

- MACD のクロス、0 ラインのどちらにしているかを注視する。  
0 ラインより下でのゴールデンクロストレンドの「転換」を示す  
0 ラインより上でのゴールデンクロストレンドの「継続」を示す  
  
0 ラインより下でのデッドクロストレンドの「継続」を示す  
0 ラインより上でのデッドクロストレンドの「転換」を示す

以上が MACD の基本的な使用方法です。

[▲目次へ戻る▲](#)

## ◆ディレクショナル・ムーブメント・インデックス

(Directional Movement Index、DMI)

ディレクショナル・ムーブメント・インデックスは J. Welles Wilder によって考案され、1978年の著書、“New Concepts In Technical Trading Systems”によって発表されました。

DMI は、プラス方向の指標 (+DI) とマイナス方向の指標 (-DI) とで構成され、市場価格変動の方向性を算出する事によって、価格の均衡点を見つけ出す事を目的とします。

### ・売買ポイント

#### 「買い」

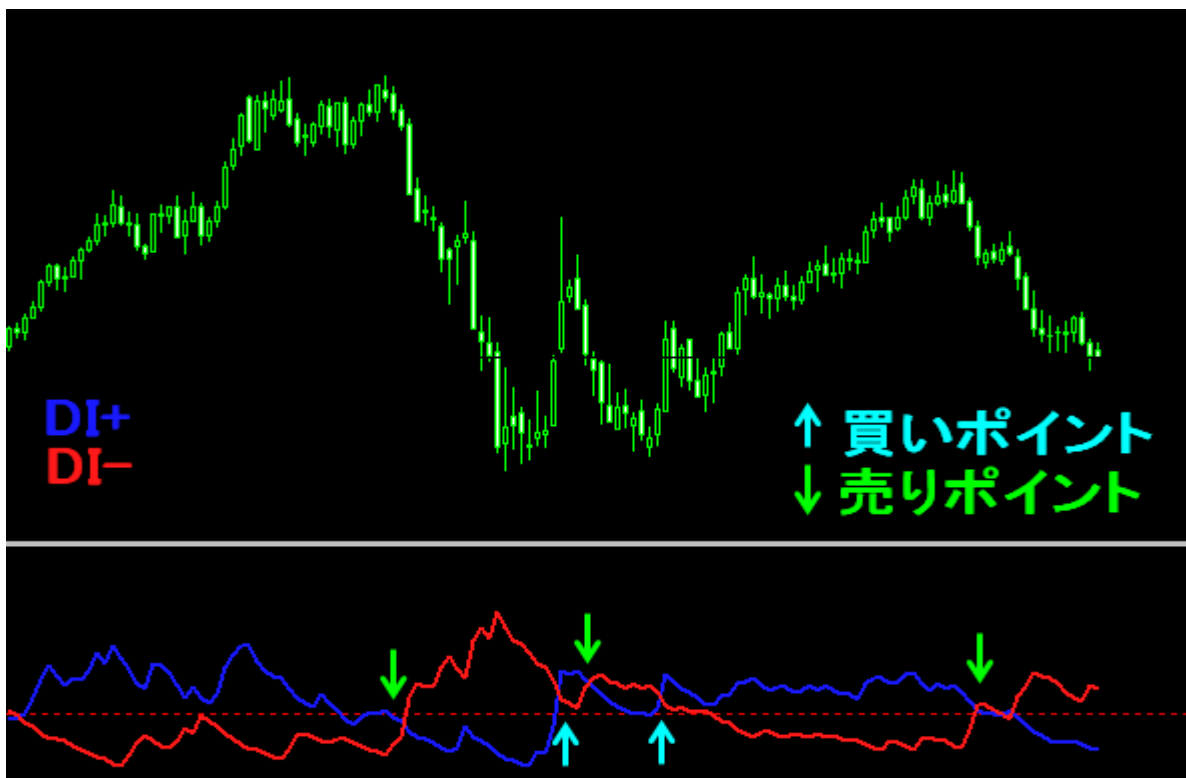
(+DI) が (-DI) の上方にあれば上昇トレンドとみなし買い。

(+DI) が (-DI) を下から上抜けた時に買い。

#### 「売り」

(+DI) が (-DI) の下方にあれば下降トレンドとみなし売り。

(-DI) が (+DI) を下から上抜けた時に売り。



[▲目次へ戻る▲](#)

◆アベレージ・ディレクショナル・ムーブメント・インデックス  
(Average Directional Movement Index、ADX)

アベレージ・ディレクショナル・ムーブメント・インデックス (ADX) は J.Welles Wilder によって考案され、1978年の著書、“New Concepts in Technical Trading Systems”によって発表されました。

この指標はプラス方向インディケータ（+DI）とマイナス方向インディケータ（-DI）によって構成されています。この2つのインディケータの事を一般的に方向性指数（Directional Movement Index）と呼び、この指標に Wilder 平滑化を施す事により、最終的な ADX が求められます。

ADX は市場のトレンドの強さを判断する為の指標で、0～100で表示されます。この値が大きい程、市場のトレンドが強いと言えますが、この指標の算出に市場の方向性は重要なものの、この指標自体は方向性指標ではないという事を留意する必要があります。



ADX が 40 以上であれば非常に強いトレンドであり、  
20 以下であればトレンドがない、もしくは、揉み合い相場であると判断出来ます。

一般的にトレーダーは、トレード手法をより確実なものとする為に、この指標をフィルターとして他の指標と組み合わせて利用します。

多くのトレーダーは指標が 20 のラインを上抜ける所で早期のトレンドシグナルと捉え、逆に 40 を下抜ける時に現状トレンドの終息シグナルであると判断します。

[▲目次へ戻る▲](#)



◆モメンタム (Momentum)

モメンタムは指標の中でも最もシンプルな指標の一つで、分類としてはオシレーター系になります。モメンタムとは「勢い・はずみ」という意味で、設定期間内の価格変化や相場の勢いを計るテクニカル指標です。

価格の変動が急になる程、モメンタムの動きも大きくなり、価格の変動が緩くなるに従ってモメンタムの動きも小さくなります。

モメンタムは MACD のようにトレンド追随型指標として利用する事も出来ます。また、先行指標として使う事も出来ます。

価格が急上昇/急下降（誰もがまだ下がる、または、上がると思う時）する事によって、天井/底を形成すると仮定する方法です。

相場が天井に達した時、モメンタムは一旦、急上昇してから下がり、価格は引き続き上昇、または、横這いに推移するケースが多く見られます。

同じように、モメンタムが一旦、急下降してから上がり、価格は引き続き下落、または、横這いに推移するケースも多く見られます。

例えば、モメンタムが非常に高く上昇してから反落した場合、価格は引き続き上昇すると見た方が良いでしょう。

どちらにしても、モメンタムのシグナルを価格が反映した時に取引をする事が重要です。



・売買ポイント

「買いシグナル」

モメンタムが0を下から上に抜いた時。  
モメンタムが底を形成し続けた後に反発した時。

「売りシグナル」

モメンタムが0を上から下に抜いた時。  
モメンタムが天井を形成し続けた後に反落した時。

[▲目次へ戻る▲](#)

◆ R O C (RateofChange)

レート・オブ・チェンジ (ROC) は現在価格と特定 n 期間前価格との差分を表し、ポイント、または比率のどちらかで表示する事が出来ます。「モメンタム」も同じような情報を表示しますが、ROC は比率としても表示する事が出来ます。

※レート・オブ・チェンジは以下の式によって求められます

ROC ポイント = 【現在価格 - n 期間前価格】

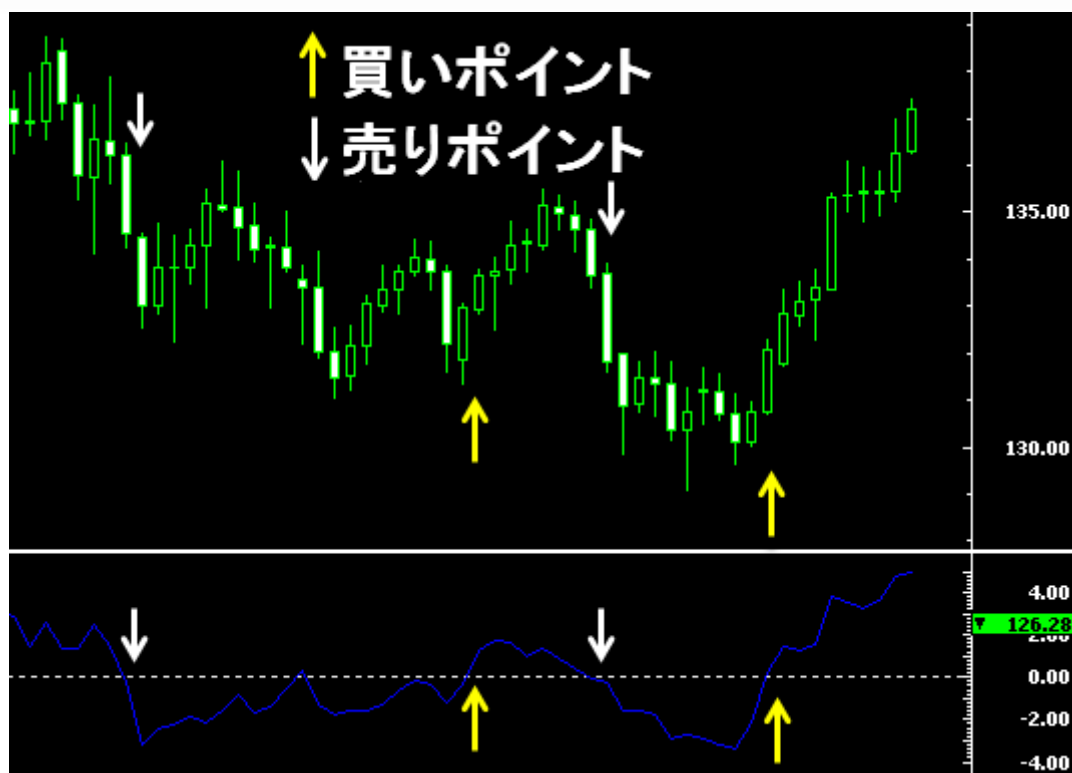
ROC パーセント = 【((現在価格 - n 期間前価格) / n 期間前価格) × 100】

ROC はオシレーター系の指標で、設定期間内の価格の変化幅を計測して表示します。

価格が上昇すると ROC は上昇し、価格が下がると ROC は下降します。  
価格変化が大きい程、ROC の変化も大きくなります。

ROC 設定期間は 1 ~ 200 まで幅広く利用され、12 と 25 は短期/中期期間として比較的、よく使われます。

ROC が上下に行き過ぎる程、相場が反転する可能性が大きいと言えますが、多くのモメンタム指標と同じように指標が行き過ぎを示してからある程度の時間において価格トレンドが維持される事がありますので、相場が変動し始めるのを待ってから慎重に注文を出す方が良いでしょう。



・ 売買ポイント

「買いシグナル」

ROC が 0 以上で強気相場とみなし買い。

「売りシグナル」

ROC が 0 以下で弱気相場とみなし売り。

[▲ 目次へ戻る ▲](#)

◆ R S I (RelativeStrengthIndex)

RSI (リラティブ・ストレンクス・インデックス) は J. Wells Wilder によって考案され、1978年の彼の著書、“New Concepts in Technical Trading Systems”で紹介されました。

相場の「買われ過ぎ/売られ過ぎ」を計る代表的指標です。

「RSI」は直近のローソク足の終値と一本前のローソク足の終値とを比較して、上下どちらの方向にどの程度動いているかを比較して表示します。この指標は0～100の間で推移し、上昇局面になると50より上で、下降局面になると50より下で推移します。

25以下は売られ過ぎゾーン、75以上は買われ過ぎゾーンを表します。

・売買ポイント

「買いシグナル」

RSI が25以下の時は、売られ過ぎとみなし買い。

RSI が50ラインを上抜いた時に強気相場とみなし買い。

価格が底を形成していて、RSI が上昇トレンド中の押し目にある時に買い。

「売りシグナル」

RSI が75以上の時は買われ過ぎとみなし売り。

RSI が50ラインを下抜いた時に弱気相場とみなし売り。

価格が天井を形成していて、RSI が下降トレンド中の戻し目にある時に売り。

実際に見てみましょう。

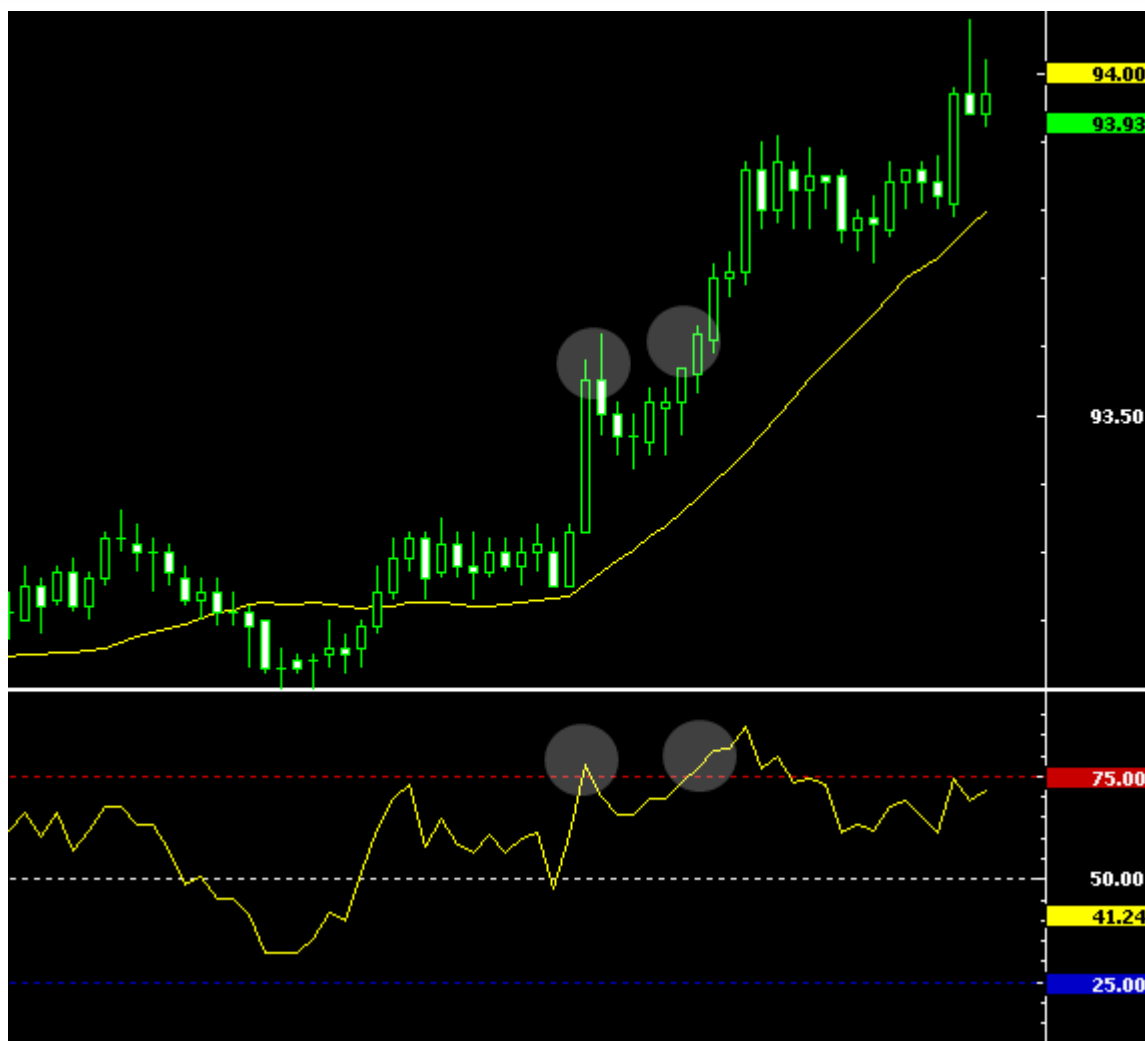


75以上が買われ過ぎゾーン。

25以下が売られ過ぎゾーン。

チャートを見てみると、25以下から相場が反転し、一番右端の方でRSIは75以上を示し、ここから下落かというような状態になっています。

このように、移動平均線やMACDでは知る事の出来ない、相場の行き過ぎをこのRSIは明確に示してくれます。



しかし、欠点もあります。

相場の行き過ぎを明確に示してくれはするものの、この RSI も絶対ではないですし、相場の行き過ぎは常、という言葉の通り、RSI が 75 以上を示し買われ過ぎゾーンに入っているにも関わらず、相場は上昇を続ける時も多々あります。買われ過ぎゾーンは相場が反転し易くもありますが、その前に RSI が 75 以上を示している時は相場はアップトレンドの中にあります。

従うべきは、今、起きているトレンドです。  
トレンドに逆らう事は絶対に許されません。

幾ら RSI が異常値を示しても、トレンドに従うべきであり、RSI に従ってトレードするという事は逆張りになりますし、相場の流れに逆らう事になってしまいます。



2008年8月のポンド円チャートです。  
RSI が25以下の売られ過ぎゾーンに入ってから、さらに1700pips程、下落しています。

幾ら売られ過ぎゾーンに入っているからと言って、ここで安易に売っていたら、どうなっていたでしょうか・・・。

何回も言いますが、従うべきはトレンドです。  
とにかくトレンドには逆らってはいけません。



## 【ファーストステップFX】Part2第5章テクニカル分析

この RSI の買われ過ぎゾーンからのトレード、売られ過ぎゾーンからのトレードをする時は、そのゾーンに入ったから反転する訳ではなく、買われ過ぎゾーンから再度 75 以下に戻って来る時、売られ過ぎゾーンから再度 25 以上に戻って来る時にトレードの参考として使用します。



再度、買われ過ぎゾーン、売られ過ぎゾーンから戻って来る時は、相場が底打ち、天井を付けた後に現れます。

しかし、それでも移動平均線の方には逆らったトレードになってしまいます。RSI はあくまでも逆張り指標ですので、強いトレンドに対しての有効性は非常に弱くなってしまいます。



売られ過ぎ、買われ過ぎゾーンの外に見るポイントがあります。  
それは真ん中の画像の50のラインです。

ここより上はトレンドがアップトレンド傾向にあり、ここより下はダウントrend傾向にあります。

更に画像中の白丸のように、この50のラインを一旦、上抜けた後のRSIの押し目での買い（右の白丸）、50のラインを一旦、下抜けた後のRSIの戻りで売り（左の白丸）という形で使用する事が出来ます。

この場合、売られ過ぎ、買われ過ぎゾーンでの逆張りよりも、順張りに近い形になりますので、多少、効果的に使用出来ます。



大きな相場を作った時、必ずその相場の終わりを告げる為にRSIが買われ過ぎゾーンへと到達します。画像はEUR/USD週足に26週移動平均線とRSIを表示しています。

移動平均線でその相場の終わりを捉える前に一番早くその相場の終わりを察知して警告を出してくれるのがこのRSIです。

もう一つ見てみましょう。

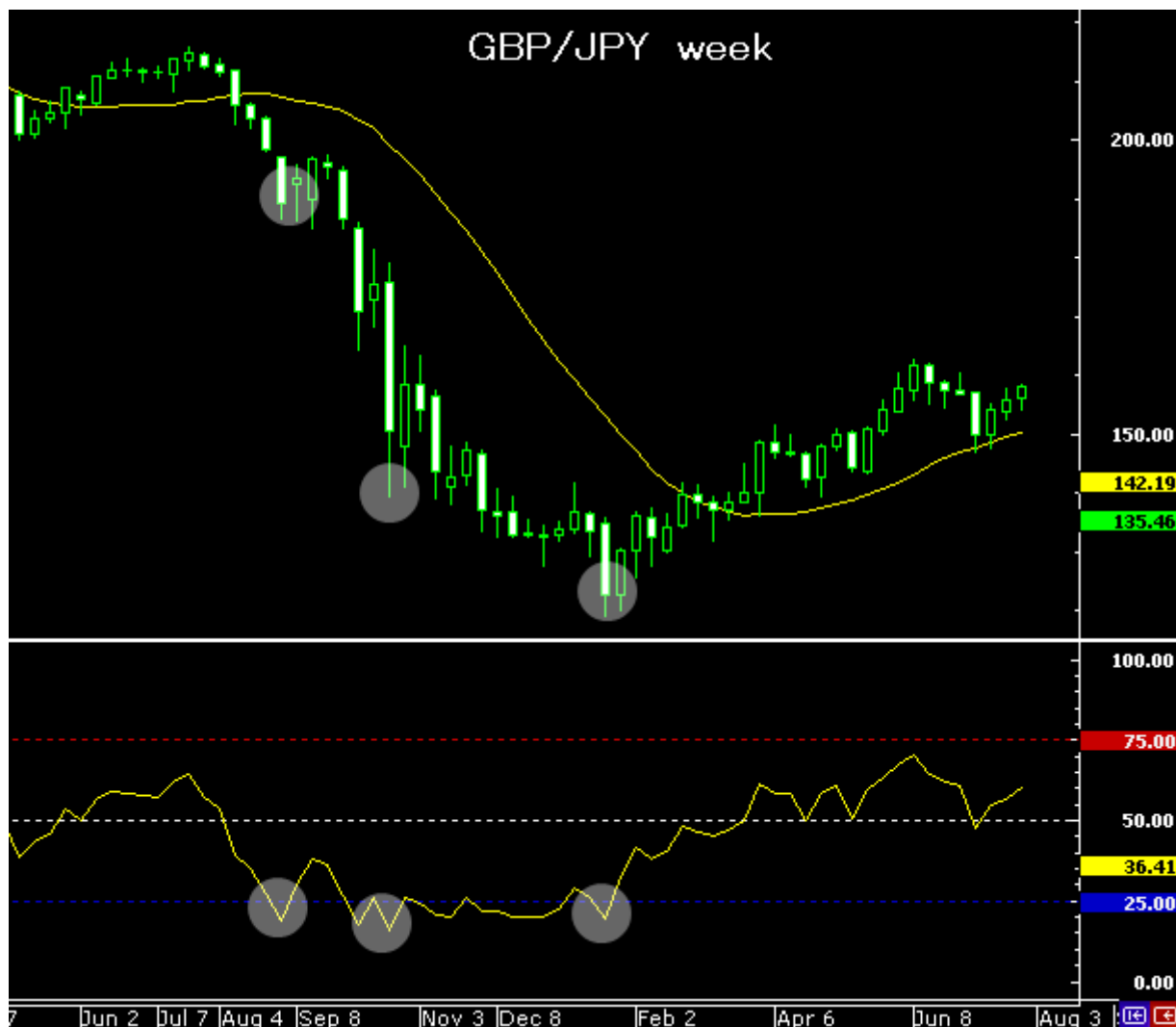


NY ダウ週足です。NY ダウが怪しいと思い始めた数時間後に暴落が来たのですが、その怪しい理由がこのRSIの買われすぎゾーン越えでした。

その前に大きなアップトレンドの大相場を作っています。ここまで早く下落が来たので、若干、驚きもしましたが、このように必ずニュースより先にテクニカルでサインが出ます。

ファンダメンタルズを気にしなくても良いという理由はここにあり、テクニカルでサインが出た後にそれ相応のニュースが出て来ます。

何回も言いますが、テクニカルでサインが出たから、どんなニュースかは分かりませんが、それ相応のニュースが出て来るだろうというように先を読む事が出来ます。



買いの場合も同じく、大きな相場を作った後にサインが出ますが、画像の場合のように更に下落していく場合もあります。

画像左側の白丸のように、サインが出た後、すぐに下落が再開してしまった場合、このRSIのサインは無効になります。真ん中のサインも同じです。

このようにまだ下落の途中でもサインが出てしまう事があります。これがRSIの弱点です。

ですので、この RSI は移動平均線や MACD ほど信用してはいけません。

売られ過ぎゾーン、買われ過ぎゾーンからの転換した所をピンポイントで狙う時のみ有効に働きます。

RSI を最後まで信じてポジションをホールドしてはいけません。

こういった場合もありますので、移動平均線や MACD 等と組み合わせて使用する事で、この弱点を回避出来ますし、最後まで信用せず、ピンポイントの部分だけの使用に限るルールを作っておけば、この RSI も非常に有効に使用出来ます。

このようにその弱点を理解しておけば、どんなテクニカルも有効に使用する事が出来る筈です。

[▲目次へ戻る▲](#)

◆ ストキャスティクス・モメンタム・インデックス

(StochasticMomentumIndex、SMI)

ストキャスティクス・モメンタム・インデックス (SMI) は WilliamBlau によって考案されました。

SMI は平滑化ストキャスティクス・オシレーターと SMISignalLine とで構成されています。

従来の「ストキャスティクス・オシレーター」は直近のロウソク足の終値と過去  $n$  期間の高値/安値の差分を表示しているのですが、SMI ではその代わりに過去  $n$  期間の高値/安値の中間値との差分を比較して表示します。更に直近の終値との差分は DEMA (直近の終値の差分の EMA の EMA) によって平滑化されて表示されます。

直近の終値が  $n$  期間の中間値より大きい場合、SMI はプラスになり、小さい場合、SMI はマイナスになります。指標は  $\pm 100$  の間で上下し、同じ期間の「ストキャスティクス・オシレーター」よりダマシが少ない事が特徴です。



・売買ポイント

「買いシグナル」

SMI が SMISignalLine を上抜いた時に買い。

SMI が売られ過ぎレベル（-40）を下抜けてからから、再びそのレベルに戻った時に買い。

「売りシグナル」

SMI が SMISignalLine を下抜いた時に売り。

SMI が買われ過ぎレベル（+40）を上抜けてからから、再びそのレベルに戻った時に売り。

※価格が一連の高値を更新し、SMI が前回の高値を上抜けなかった時等は買いシグナル。

[▲目次へ戻る▲](#)



◆スロー・ストキャスティクス・オシレーター

(StochasticOscillator (Slow))

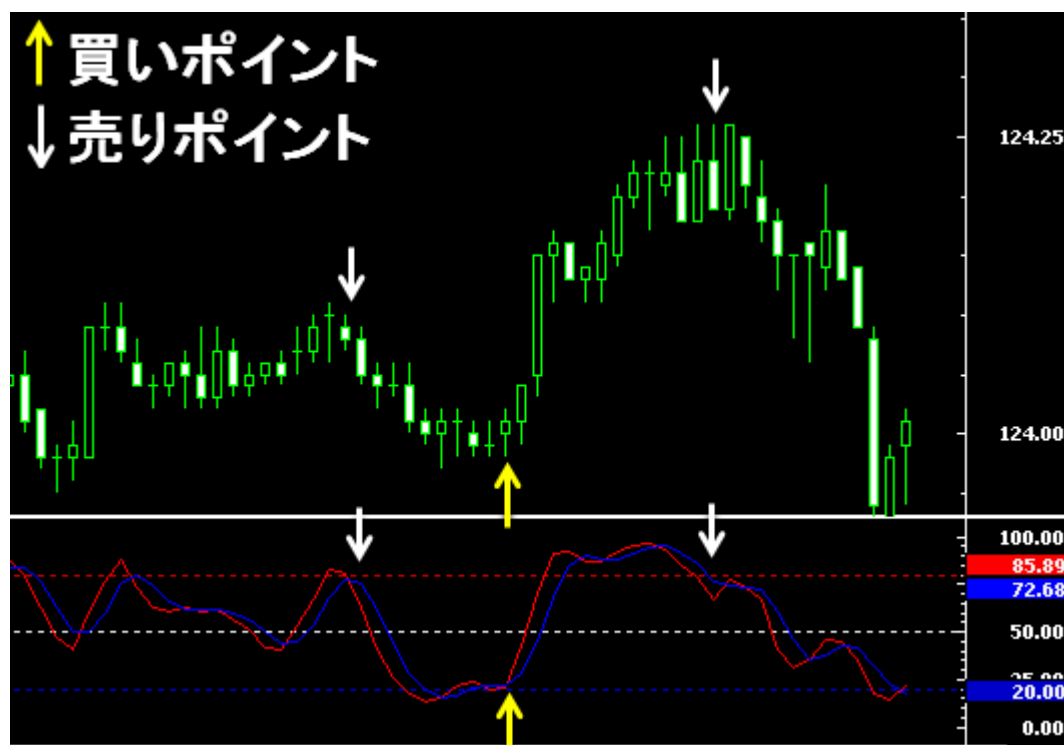
ストキャスティクス・オシレーターはTuscharChandeとStanleyKrollによって考案され、1992年12月版の“StocksandCommodities”上で“StochasticRSIandDynamicMomentumIndex”という記事に掲載されました。

スロー・ストキャスティクス・オシレーターは「%K (ファスト)」と「%D (シグナル)」の2本の線から構成され、内容は下記式で表わされます。

ファスト%K=【((直近の終値-%K期間中の最安値)/(%K期間中の最高値-%K期間中の最安値))×100】

スローイング%K=【ファスト%Kの3期間単純移動平均線(SMA)】

%D=【スローイング%Kの3期間単純移動平均線(SMA)】



[▲目次へ戻る▲](#)

◆ シャフ・トレンド・サイクル (SchaffTrendCycle、STC)

シャフ・トレンド・サイクル (STC) は1990年台に DougSchaff によって考案され、トレンドと価格は周期 (サイクル) を持って上下動を繰り返すという仮定の下に作られています。

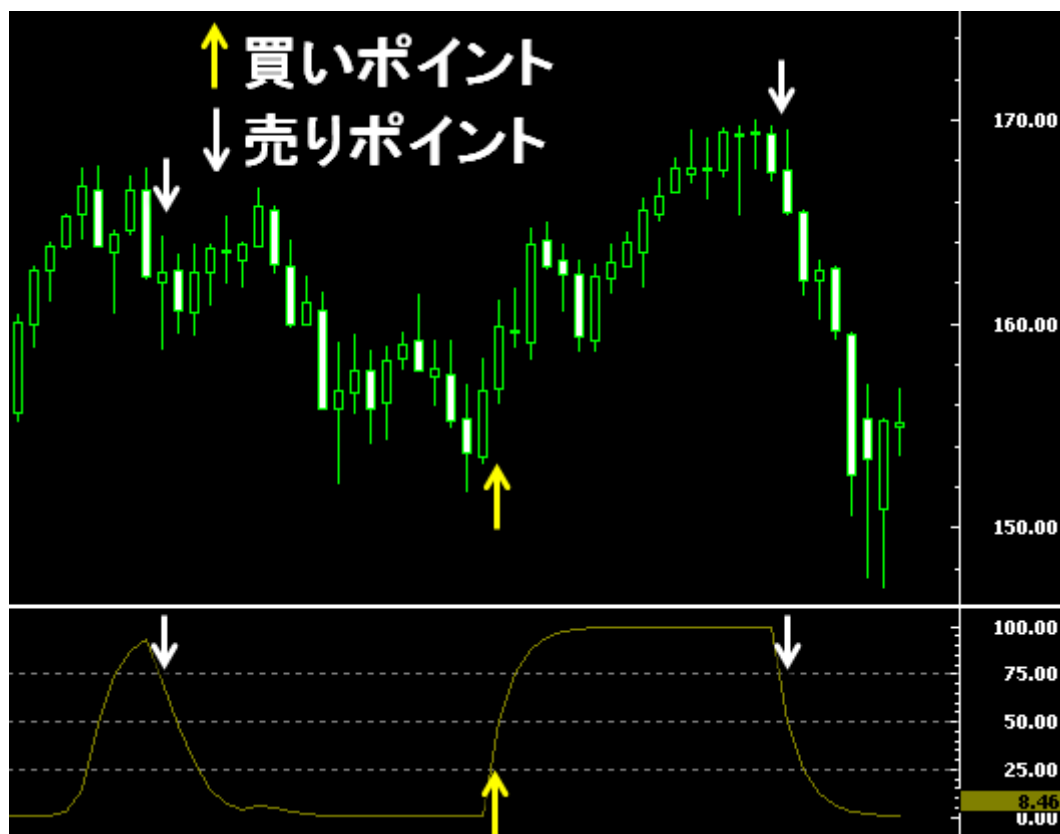
STC は Wilder 平滑化されたストキャスティクスアルゴリズムに「MACD」を合成して表示されています。

表示には下記3つの値を利用しています。

- ・ MA 1 期間：短期指数移動平均線 (EMA) デフォルト値：23日
- ・ MA 2 期間：長期指数移動平均線 (EMA) デフォルト値：50日
- ・ TC 期間：サイクル長の半分に設定デフォルト値：10日

STC が下がる時、トレンド・サイクルが下がる他、価格は安定、あるいは、サイクルに同調して下がる傾向があります。

STC が上がる時、トレンド・サイクルは上がる他、価格は安定、あるいは、サイクルに同調して上がる傾向があります。



・売買ポイント

「買いシグナル」

STCが20-30を上抜いた時に上昇トレンドとみなし買い。

「売りシグナル」

STCが70-80を下抜いた時に下降トレンドとみなし売り。

※なお、STCが0-10、90-100の間を推移する時は、価格が安定する傾向にあります。

[▲目次へ戻る▲](#)

## ◆コモディティ・チャンネル・インデックス

(CommodityChannelIndex、CCI)

コモディティ・チャンネル・インデックス (CCI) は Donald Lambert によって考案され、今では商品だけではなく株式市場や為替市場においてもこの指標が利用されています。

CCI は現在の市場価格が統計的な平均値からどのくらい乖離しているかを数値化し、数値が高ければ平均価格と比べて市場価格が著しく高値である事を示し、数値が低ければ市場価格が著しく安値である事を示します。

CCI は中間価格と、「設定期間の中間価格の平均値」との差を求め、その差と「設定期間平均差」とを比較した値を定数で乗じた値を+100~-100で表示します。

CCI の期間を短くする事により、CCI の数値の変動が激しくなり、+100から-100の範囲に収まる割合が低下します。またシグナルが価格に先行して発生しやすいという特徴があります。

### ・売買ポイント

「買い」

-100以下の数値を示した時、売られ過ぎとみなし買い。

「売り」

+100以上の数値を示した時、買われ過ぎとみなし売り。



[▲目次へ戻る▲](#)

◆デトレンディッド・プライス・オシレーター

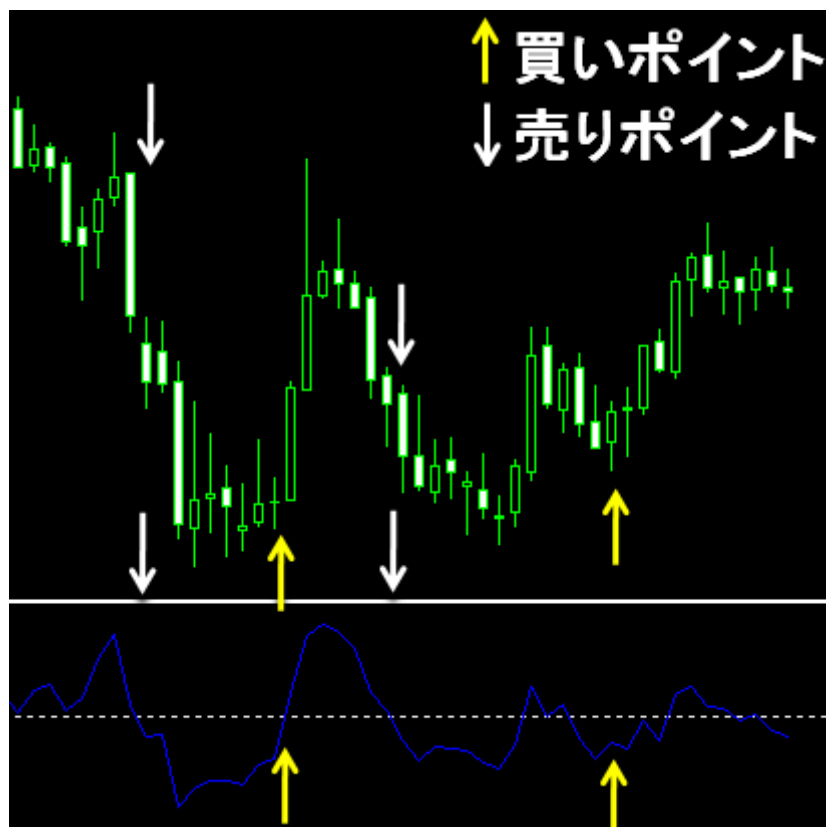
(DetrendedPriceOscillator、DPO)

デトレンディッド・プライス・オシレーター (DPO) は StevenAchelis の著書、  
“TechnicalAnalysisA-Z” によって紹介されました。

この指標は「 $[(n/2) + 1]$  設定期間」の価格変動と現在値とを比較する事によって「設定期間」より長いサイクルで発生するトレンドをフィルタリングして除去する事を目的とした指標です。

このフィルタリングにより、短期サイクルで起きる市場の潜在的な「買われ過ぎ/売られ過ぎ」を見つけ出すのに向いています。

デトレンディッド・プライス・オシレーターは買われ過ぎ・売られ過ぎを判断するための指標であり、より短期の動きを明確に捉える事が出来ます。また、デトレンディッド・プライス・オシレーターは21日間、あるいは、それより短い期間が最も有効であると考えられています。



### ・ 売買ポイント

#### 「買い」

DPO が売られ過ぎレベルを割り込んで、再びそのレベルを上回った時に買い。  
DPO が 0 を下から上抜けた時に買い。

DPO が上昇トレンド中の押し目があり、価格が底値付近にある時に買い。

#### 「売り」

DPO が買われ過ぎレベルを突き抜け、再びそのレベルを割り込んだ時に売り。  
DPO が 0 を上から下抜けた時に売り。

DPO が下降トレンド中の戻し目があり、価格が天井値付近にある時に売り。

[▲目次へ戻る▲](#)

◆ トウルー・ストレングス・インデックス (TrueStrengthIndex、TSI)

トウルー・ストレングス・インデックス (TSI) はRSIから派生したインディケーターで、WilliamBlau.によって考案されました。

TSIは価格に先行するモメンタム系の特徴と、トレンドを追従する「移動平均線(MA)」の特徴とを兼ね備えた、相場の方向性と「買われ過ぎ/売られ過ぎ」を判断する指標です。

・売買ポイント

「買いシグナル」

TSIがシグナルラインを上抜いた時に買い。

TSIが-25以下の時は売られ過ぎとみなされ、-25を上抜けた時に買い。

ヒストグラムが0を下から上に抜いた時に買い。

「売りシグナル」

TSIがシグナルラインを下抜いた時に売り。

TSIが+25以上の時は買われ過ぎとみなされ、+25を下抜けた時に売り。

ヒストグラムが0を上から下に抜いた時に売り。





[▲目次へ戻る▲](#)

◆ウィリアム・パーセント・レンジ (Williams' PercentRange (%R))

ウィリアム・パーセント・レンジ (%R) は LarryWilliams によって考案され、相場の「買われ過ぎ/売られ過ぎ」レベルを表示する指標です。

目盛が0～-100で表示される事と、ラインが平滑化されていない事を除いては「ストキャスティクス・オシレーター」に似たモメンタム系の指標です。 %R は、直近のローソク足の終値と過去 n 期間中の高値/安値との差分を比較して表示します。

%R は相場の方向転換を予測する点で優れており、この指標がピークを形成した後に相場が転換する事がよく見受けられます。

0や-100といった数値を付け易く、逆張りでの素早い売買が可能となる反面、敏感過ぎてダマシに遭遇する事もあります。そのような場合には「移動平均線 (MA)」と組み合わせる事により、%R が価格に先行した形で売買サインを出し、そのシグナルに若干、遅れてローソク足と移動平均線 (MA) がクロスした段階で実際の売買を行なう事でダマシを軽減する事が期待出来ます。



・ 売買ポイント

「買いシグナル」

%R が -100 から -80 の時。

「売りシグナル」

%R が 0 から -20 の時。

[▲ 目次へ戻る ▲](#)

◆ピボット・ポイント (PivotPoints)

前日の節目となる価格から、その日の節目となる価格水準を予測しようという指標で、保ち合い局面で有効だと言われています。1日以内の極めて短期的な予測なので、1日の間に何回も売買するトレーダー向けの手法といえます。

上値抵抗ポイント

R3

R2

R1

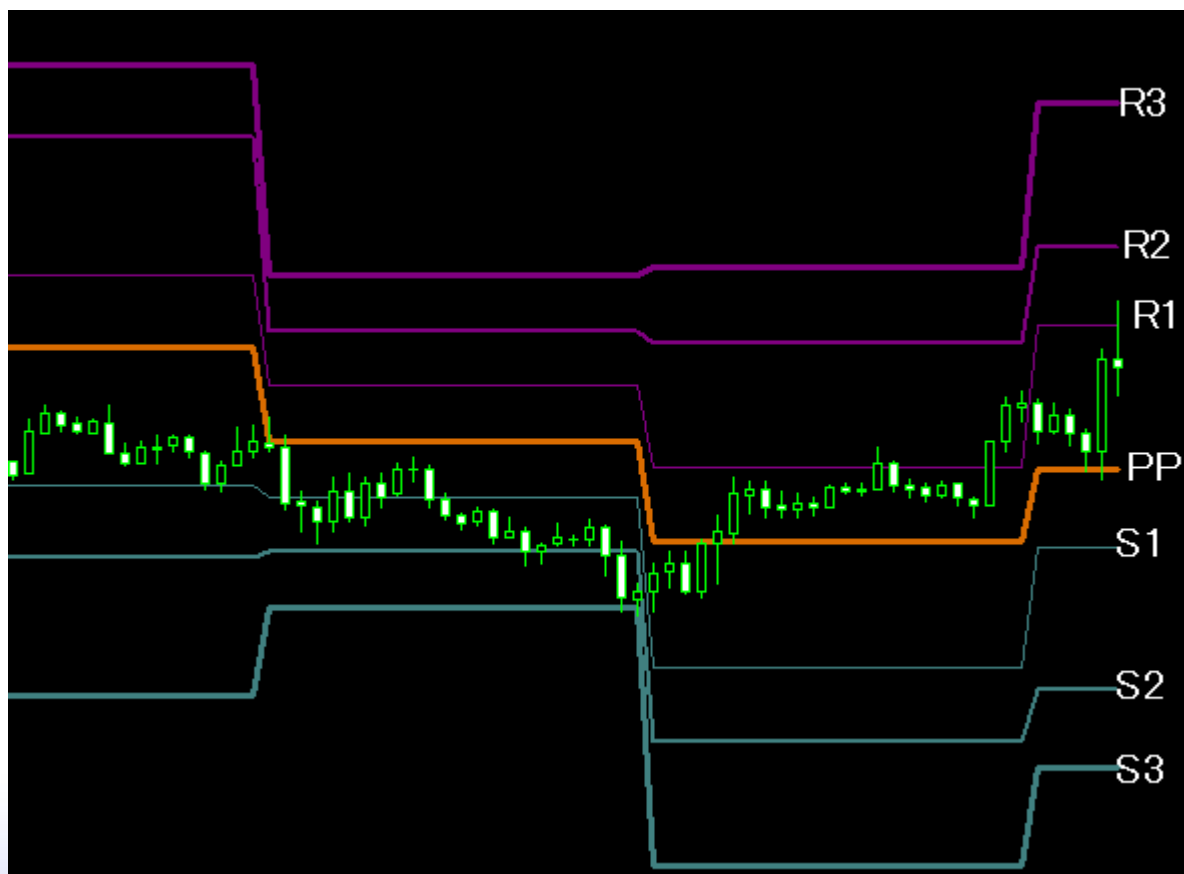
PP ピボット (当日の中心となる価格)

下値抵抗ポイント

S1

S2

S3





Part2トレーダーとしてのレベルアップの為に  
第5章テクニカル分析  
株式会社チャートマスター